

たかなべ

地名の由来

1、はじめに 教育長、議会議長・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2、小字一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

蚊口浦（五字）・・・・下中洲、新中町西浦、蚊口往還南、茱萸原、蚊口

南高鍋（七〇字）・・・・塩田、筏、石原、蓑江、小嶋田、茂廣毛平付、水谷坂平付、職司ノ四、職司ノ三、職司ノ一、毛作谷、職司ノ二、内宮田、宮田前、旧城内、奥ノ下、恵良、光音寺、馬場田、樋の久保、浦芳太郎下、野首、重間、蚕丁場、大平寺、鐘塚、雞の田、櫻谷、上園、内野々、新山、内野々面上、四ツ塚、毛作、山伏山、杉谷上、日置道東、水谷原、越ヶ溝下毛、越ヶ溝上三、大久保、妻道南、日置牧、上永谷、前古場、廻り尾、稻荷西、東越ヶ溝、蓑江野地、稻荷東、神祭野、式本松、雲雀山、穂先田、穂先田中嶋ノ一、穂先田中嶋ノ二、肥後牧、高岡、堀ノ内、久保田、上地頭用、地藏坂下、肥後坂下、鷲ヶ久保、前牟田、馬込、蓑添、永谷権現下、小落水、下永谷

北高鍋（四〇字）・・・・上畑田、中畑田、下畑田、洗井、七反田、小丸、挽木出口、道具小路、小鶴、下火月、砂子田、井手神、瀬ノ口下、中鶴屋敷村、権現前、上嶋城、下嶋城、茂広毛、樋渡、大峯、今嶋南、頭無井手、中川池、下屋敷北、菖蒲池、今嶋、大將軍下、中間小路北、宮越東、河原村東、中須ノ一、中須ノ二、中須ノ三、中須ノ四、萩原、大池久保、天神鶴、菖蒲池村東往還北、菖蒲池東南、新萩原
※ 下火月は東町の内、砂子田は今嶋の内

高鍋町（二字）・・・・町、東町

上江（七六字）・・・・水除下、松ヶ鼻、堂ヶ瀬、安蔵、馬場原下、馬場原前、水除、下小路後、西畑田、東畑田、高月、嶋田、黒谷、松本、山下、飯長寺、谷坂、船塚廻、平原、中嶋、鴨作、馬場原、川田、楠木、三十割、片嶋田、仙蔵寺、森、羽根田、上ノ園、上ノ園下、長法寺下、鍋田、鷲谷、山王、南中原、北中原、青木、野首、崩戸、崩戸池ノ向、竹嶋、五郎丸河原、五郎丸、老瀬河原、木ノ瀬下、荒原、木ノ瀬、田畑、老瀬、陣ノ本、烏帽子形、加志揚、老瀬坂上、上耳切、東小並、西小並、大谷、中尾、黒土田、堺谷、牧内、新山、立野、市ノ山、永田、高平、江平、福井牟田、南唐木戸、北唐木戸、牛牧原、下耳切、北牛牧、南牛牧、大戸ノ口

※ 崩戸池ノ向は崩戸の北西で河川敷内

持田（九五字）・・・・小長田、黒瀬、松山、久保鼻、打切、中村、下坊ヶ迫、柳丸、古宮田、別府下、大阪下、小丸、三ノ平、橋ノ本、元ノ下、池端、古河、待居、濱河、久保田、堀川下、中河原、松ヶ鼻、正ヶ井手、小丸出口、宮越下、杉瀬、坂本、中尾、尾崎、島ノ下、平ノ下、東光寺、岸ノ上、五反田、大門、深牟田、伊園、檜谷、家床前、真米、池田、持田、樋ノ本、勝り、上ノ塩入、羽坂、高河原、勝り下、下河原、下ノ塩入、船塚、龜塚、山下、迫ノ前、大年、滑岩、龜ノ首、黒池、鶴ノ口、馬坂、牛ヶ道、宮ヶ谷、正祐寺、深川開込、持田開込、新開込、鶴ノ口、家床東谷、塚ノ本、下大久保、染ヶ岡、中大久保、上ノ別府、蛸ノ口、家床東谷、家床、檜山、水洗、檜原、新堤、檜、穴ノ谷、関所、西ヶ原、計塚、鬼ヶ久保、牛牧、下り松、俵橋、番野地、柳、深川、嶋野、堂藪、萩原下、橋ノ本は元ノ下の南西で河川敷内、平ノ下は東光寺と嶋ノ下の堺で東光寺の内、岸ノ上は五反田の内、番野地は俵橋の西で国道敷内

3、小字の分布図
蚊口浦・南高鍋・北高鍋・高鍋町・上江・持田・・・・・・・・・・3

4、高鍋の地名（地名の由来）
蚊口、菖蒲池、小鶴・天神鶴・中鶴（議会、たよりNo.11）・・・・4
茂広毛、嶋野（議会、たよりNo.12）・・・・4
神祭野、雲雀山（議会、たよりNo.13）・・・・5
雲雀山（つづき）（議会、たよりNo.14）・・・・5
堀の内、久保田、上地頭用（議会、たよりNo.15）・・・・6
ごまさ（高岡）、妻道南（議会、たよりNo.16）・・・・6
歴史上の事実による地名(3)前古場、蓑江野地（議会、たよりNo.17）・・・・7
歴史上の事実による地名(4)飯長寺、長法寺下、仙蔵寺、東光寺（議会、たよりNo.18）・・・・7
歴史上の事実による地名(5)太平寺、光音寺（議会、たよりNo.19）・・・・8
牛牧（南牛牧、北牛牧、牛牧原）（議会、たよりNo.20）・・・・8
優美な地名 桜谷、萩原、柳、茱萸原、菖蒲池（議会、たよりNo.21）・・・・9
生き残った地名 岸の上村（議会、たよりNo.22）・・・・9
尾崎、松ヶ鼻（議会、たよりNo.23）・・・・10
堀川下、安蔵、堂ヶ瀬（議会、たよりNo.24）・・・・10
崩戸、木ノ瀬、老瀬（議会、たよりNo.25）・・・・11
馬場原下、水除、正ヶ井手（議会、たよりNo.27）・・・・11

町(一)(議会だよりNo.28)	12
町(二)(議会だよりNo.29)	12
道具小路、大將軍下(議会だよりNo.30)	13
道具小路の小名(一)一寸小路、具足小路、順礼道、田ノ上、古町、 中間小路(議会だよりNo.31)	13
道具小路の小名(二)本祇園、鍛冶道具小路、上下道具小路、 下道具小路(議会だよりNo.32)	14
小丸(こまる)と(おまる) (議会だよりNo.33)	15
池端、古河、元ノ下、濱河(議会だよりNo.34)	15
切原、打切、松山、久保畠(議会だよりNo.35)	16
竹鳩、五郎丸、五郎丸河原(議会だよりNo.36)	16
平原、中嶋、鴨作(議会だよりNo.37)	17
松本、高月、黒谷(議会だよりNo.38)	18
畑田と小薄(議会だよりNo.39)	19
七反田、筏、塩田(議会だよりNo.40)	20
地名の考え方(その一)洗井について(議会だよりNo.41)	21
地名の考え方(その二)洗井について(議会だよりNo.42)	21
蓑江、小島田、石原(議会だよりNo.43)	22
水谷原、水谷坂平付(議会だよりNo.44)	22
大工小路(議会だよりNo.46)	23
蓑崎(議会だよりNo.47)	24
奥の下、野首、浦芳太郎下(議会だよりNo.48)	24
重間(議会だよりNo.49)	25
鐘塚、太平寺(再)(議会だよりNo.50)	26
蚕丁場(議会だよりNo.51)	26
市の山、牧内(議会だよりNo.52)	27
高平、江平(議会だよりNo.53)	28
南唐木戸、北唐木戸、福井牟田、中尾(議会だよりNo.54)	28
東小並、西小並、黒土田(議会だよりNo.55)	29
牛牧(牛牧原、北牛牧、南牛牧、上耳切、下耳切、老瀬坂上) (議会だよりNo.56)	30
老瀬、烏帽子形、加志揚(議会だよりNo.57)	31
山王、上ノ園、羽根田(議会だよりNo.58)	31
宮越(議会だよりNo.60)	32
上宮越Ⅱ立花神社参道、挽木出口(議会だよりNo.61)	33
三十割、鴨作、片島田(議会だよりNo.62)	34
中嶋、船塚廻、飯長寺、谷坂(議会だよりNo.63)	34
谷坂(補足)、山下、平原、下小路後(議会だよりNo.64)	35

馬場原、川田、楠木(議会だよりNo.65)	36
大年、鳴野、柳、深川(議会だよりNo.66)	37
檜、檜谷、檜原、檜山、新堤(議会だよりNo.67)	38
大門、東光寺、計塚、西ヶ原、関所、鬼ヶ久保、穴の谷、牛牧 (議会だよりNo.68)	39
鬼ヶ久保地域の古墳とその他の史跡(議会だよりNo.69)	40
俵橋、番野地、染ヶ岡、中大久保、下大久保(議会だよりNo.70)	41
馬坂、鵜戸開込、新開込、深川開込、持田開込(議会だよりNo.71)	42
牛ヶ道、鵜戸ノ口、黒池、亀ノ首、滑岩(議会だよりNo.72)	43
正祐寺、宮ヶ谷、迫前、山下、家床、亀塚(議会だよりNo.73)	44
下河原、堂敷、高河原、真米、持田、羽坂、船塚(議会だよりNo.74)	45
勝り、勝り下、上塩入、樋の本、持田、池田、島の下、杉瀬 (議会だよりNo.80)	46
菖蒲池東往還北、菖蒲池東南、下中州、萩原下、新萩原、萩原、 天神鶴、菖蒲池、中須ノ一、中須ノ二、中須ノ三、中須ノ四 (議会だよりNo.81)	47
高鍋城の施設(一)(議会だよりNo.82)	48
高鍋城の施設(二)(議会だよりNo.83)	48

著者紹介

氏 名 石川 正雄 (いしかわ まさお)

生年月日 明治四五年一月十五日生

略 歴 高鍋高女・旧制高鍋中学校

高鍋高校・大宮高校 等勤務後

高鍋図書館長・高鍋史友会会長等々を歴任

「高鍋町議会だより」に「地名の由来」の投稿が始まったのは昭和五七年。

『川崎清克氏（故人・元高鍋町議会議員）から、小字名のおこりについて依頼があり、大事なことであり興味を持っていたので引き受けたのが始まりでした。地名は生きた化石のようなもので大事にしなくてはならない。』

・ ・ ・ ・ 石川正雄氏談話抜粋（議会だより第十八号）

連載は昭和五七年十月発行の高鍋町議会だより第十一号から始まり、平成十二年十一月発行の第八三号まで続き、六五回を数えるに至った。



地名の由来発刊に寄せて

「地名の由来」が発刊されますことを、心よりお喜び申し上げます。

「地名の由来」は高鍋町議会が発行する議会だよりに昭和五七年から六五回にわたり、郷土の歴史研究家である石川正雄先生に執筆いただき掲載をしてきた経緯もあり、単行本として発刊されることを望んでおりました。

高鍋町は百年有余の歴史と伝統をもち、児湯郡の中心として発展してまいりましたが、時代の変遷とともに町の様相も大きく変わり、地域に伝わる「地名の由来」を知る人々も少なくなってきました。

このようなときに、「地名の由来」が発刊されることはまことに意義深いことと存じます。

そこに住む人々が地名の由来を知り、伝えていくことは大切なことであると思います。また、児童や生徒に住む町の由来を知っていただき郷土愛を育んでほしいと願っております。

他の町から転入される方も地名の由来を知ることにより高鍋に愛着を持つていただけるものと思います。

「地名の由来」が多くのの人々に愛読され、町づくりの一助になることを念願し、ごあいさついたします。

高鍋町議会

議長

柏木忠典

発刊によせて

この度、高鍋の歴史に大変詳しい郷土史家の石川正雄先生が、永年にわたり「高鍋町議会だより」に連載されました『地名の由来』が一冊の本として発刊されました。

この本には、高鍋町の地名が数多く紹介されています。私たちがよく知っているけれどもその由来までは知らない地名や、ほとんど知らない地名もたくさんあります。我がふるさと高鍋のことについて、まだまだ知らないことがたくさんあることを感じます。

この本は私たちのふるさと「高鍋」をよく知り、深く学ぶために格好の一冊になるものと考えております。

地名は、この高鍋に暮らしてきた先人が大地に残した生活のしるしであり、歴史そのもののなのです。そして、先人から私たちへの大切なメッセージなのです。それは、今を生きる私たちが未来へと伝えていくものでもあります。

『地名の由来』を家庭や学校・地域で児童生徒の皆さんから一般の方々まで、数多くの皆様に読んでいただきたいと心より願っております。

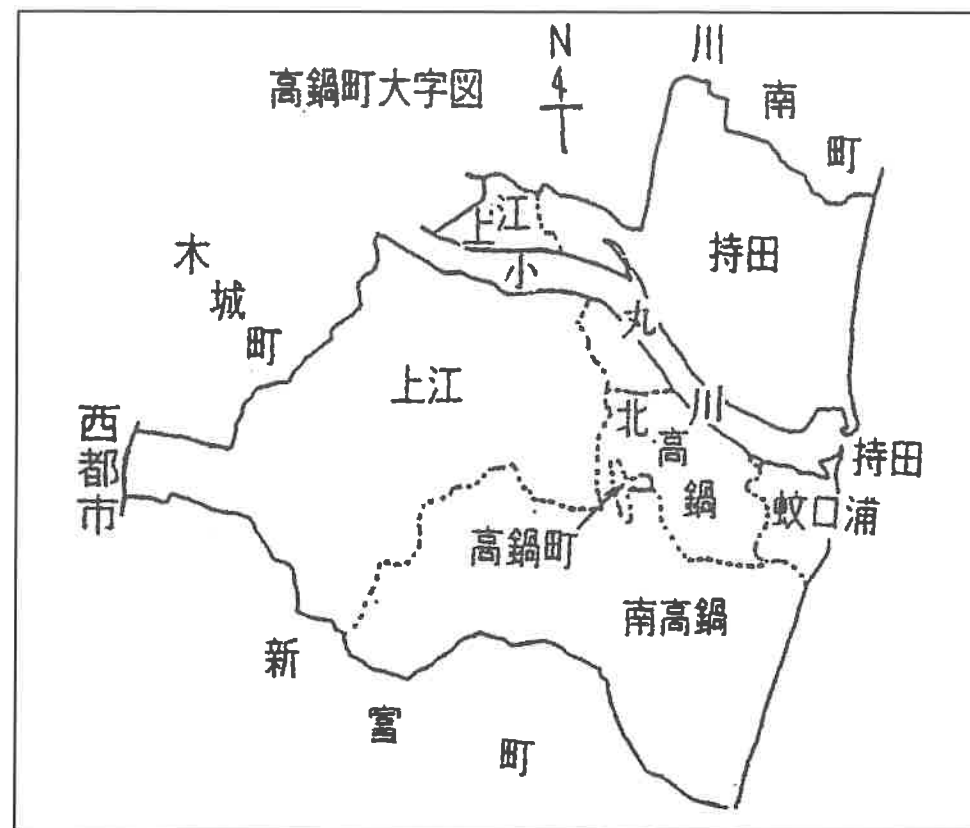
高鍋町教育委員会

教育長 三重野 保

小 字 一 覧

	町	16	穂先田中嶋ノ一		蚊 浦	53	老瀬坂上	35	上ノ別府
1	町	17	穂先田中嶋ノ二	1	蚊口 口	54	下耳切	36	家床東谷
2	東町	18	肥後牧	2	下中洲	55	牛牧原	37	家床
		19	前古場	3	新中町西浦	56	南唐木戸	38	家床前
	北 高 鍋	20	上永谷	4	蚊口往還南	57	江平	39	池田
1	萩原	21	小落水	5	茱萸原	58	高平	40	持田
2	新萩原	22	石原			59	永田	41	上ノ塩入
3	菖蒲池村東往還北	23	蓑江		上 江	60	上耳切	42	勝り下
4	菖蒲池東南	24	小嶋田	1	堂ヶ瀬			43	新堤
5	下屋敷北	25	水谷坂平付	2	馬場原下	61	東小並	44	檜山
6	頭無井手	26	神祭野	3	松ヶ鼻	62	北唐木戸	45	檜
7	中川池	27	穂先田	4	馬場原前	63	福井牟田	46	檜谷
8	樋渡	28	稲荷東	5	水除	64	中尾	47	伊園
9	茂広毛	29	廻り尾	6	水除下	65	市ノ山	48	穴ノ谷
10	下嶋城	30	稲荷西	7	下小路後	66	立野	49	深牟田
11	上嶋城	31	日置牧	8	西畑田	67	新山	50	大門
12	中須ノ四	32	妻道南	9	東畑田	68	西小並	51	五反田
13	中須ノ二	33	筏	10	高月	69	黒土田	52	樋ノ本
14	中須ノ三	34	塩田	11	嶋田	70	牧内	53	勝り
15	大池久保	35	宮田前	12	安蔵	71	堺谷	54	下り松
16	天神鶴	36	職司ノ四	13	鍋田	72	大谷	55	牛牧
17	菖蒲池	37	水谷原	14	川田	73	五郎丸	56	鬼ヶ久保
18	今嶋南	38	日置道東	15	馬場原	74	五郎丸河原	57	西ヶ原
19	大峯	39	越ヶ溝下	16	鴨作	75	竹嶋	58	関所
20	中鶴屋敷村	40	蓑江野地	17	中嶋			59	東光寺
21	権現前	41	東越ヶ溝	18	平原		持 田	60	中尾
22	瀬ノ口下	42	大久保	19	松本	1	馬坂	61	島ノ下
23	中須ノ一	43	旧城内	20	黒谷	2	鶴戸ノ口	62	尾崎
24	河原村東	44	内宮田	21	鷺谷	3	黒池	63	坂本
25	宮越東	45	職司ノ二	22	長法寺下	4	亀ノ首	64	計塚
26	中間小路北	46	職司ノ三	23	楠木	5	滑岩	65	三ノ平
27	道具小路	47	職司ノ一	24	上ノ園下	6	大年	66	池端
28	大將軍下	48	杉谷上	25	三十割	7	柳	67	古河
29	今嶋	49	越ヶ溝上	26	片嶋田	8	深川	68	坂本
30	井手神	50	奥ノ下	27	船塚廻	9	牛ヶ道	69	大阪下
31	小丸	51	恵良	28	飯長寺	10	宮ヶ谷	70	小丸
32	挽木出口	52	光音寺	29	山下	11	迫ノ前	71	元ノ下
33	小鶴	53	毛作谷	30	大戸ノ口	12	嶋野	72	濱河
34	上畑田	54	毛作	31	崩戸	13	堂藪	73	待居
35	中畑田	55	山伏山	32	青木	14	下大久保	74	別府下
36	下畑田	56	野首	33	山王	15	塚ノ本	75	下坊ヶ迫
37	洗井	57	浦芳太郎下	34	上ノ園	16	鶴戸開込	76	古宮田
38	七反田	58	樋の久保	35	羽根田	17	新開込	77	久保田
		59	馬場田	36	森	18	持田開込	78	柳丸
	南 高 鍋	60	重間	37	仙蔵寺	19	深川開込	79	中村
1	堀ノ内	61	大平寺	38	谷坂	20	正祐寺	80	堀川下
2	久保田	62	鐘塚	39	老瀬河原	21	山下	81	小長田
3	上地頭用	63	雞の田	40	木ノ瀬下	22	船塚	82	黒瀬
4	地蔵坂下	64	櫻谷	41	荒原	23	下ノ塩入	83	松山
5	肥後坂下	65	四ツ塚	42	野首	24	下河原	84	久保鼻
6	鷺ヶ久保	66	蚕丁場	43	北中原	25	染ヶ岡	85	打切
7	前牟田	67	上園	44	南中原	26	中大久保	86	堀川下
8	馬込	68	内野々	45	北牛牧	27	蛸ノ口	87	松ヶ鼻
9	蓑添	69	内野々面上	46	南牛牧	28	亀塚	88	中河原
10	永谷権現下	70	新山	47	木ノ瀬	29	真米	89	正ヶ井手
11	下永谷			48	田畑	30	羽坂	90	小丸出口
12	茂廣毛平付			49	老瀬	31	高河原	91	宮越下
13	式本松			50	陣ノ本	32	俵橋	92	萩原下
14	高岡			51	加志揚	33	水洗		
15	雲雀山			52	烏帽子形	34	檜原		

小字図



高鍋の小字名

地名は大地に刻みつけられた歴史だといわれる。最近各地で、不用意に安易な地名の変更をして議論を醸し、痛烈な批判を受けることがしばしばある。地名の本質をわきまえないところから起こるのである。高鍋町には二八五の小字がある。小字の内の単位区域は地番であるが、小字の内の更に小さな区域に名称のあるところがある。それを小名という。小字を小名という場合もあるが小字と小名は区別しておきたい。小字や小名にはそれぞれ由来由緒があるのであるが、その分からなくなつたものも多い。

◆ 蚊口（かぐち）

この地名は本来小丸川のカワグチ（川口）の意味でワ音が脱落してカグチとなり、嘉口とも書いたが、カ音の連想から「蚊」の文字を当てたものと思われる。それほど昔は蚊が多く、蚊柱という言葉があつた程である。蚊口の文字の用いられたのは古く、慶長十四年（一六〇九）蚊口浦に唐船漂着の記録がある。

◆ 菖蒲池（しよぶけ）

旭屋鉄工所から下屋敷へ抜ける道がたんぼに出たところに池があつた。黄色い花の咲く菖蒲が茂つていたところからこの地域の字名となつた。その菖蒲の子孫は、今、図書館の庭にわずかに残っている。

◆ 小鶴・天神鶴・中鶴

「ツル」の付く地名は高鍋以外にも多く、ほとんど「鶴」の字を当てているが、本来の意味は「水流」（つる）である。小丸川の氾濫によつて出来た水流の名で、小さな水流が小水流（小鶴・しんきん通り）菖蒲池・天神の側の流れが天神鶴（東小そば）、中流が中水流（中鶴屋敷）である。

地名の起源に伝説や説話によるものがある。それを拾い出してみることにする。

◆ 茂広毛（もひろげ）

東児湯青果市場から、その西の樋渡（ひわたし）に至るまでの畑地帯が「もひろげ」といわれる。水田地帯は島城（しまんじょう）である。「もひろげ」は、古い記録には、藻広毛・毛比呂計・裳広解・綴紘とも書かれている。

青果市場の対岸から南九大に至る山の斜面の字は茂広毛平付（もひろげひらつけ）と言い、もと毛比呂計神社があつた。現在では中鶴屋敷村に移され記念碑が建っている。この「もひろげ」は比木神社の祭神の一柱、福智王にまつわる伝説によつてつけられた地名である。

昔朝鮮の百濟（くだら）の王族であつた福智王は、父禰嘉王（神門神社祭神）、母之伎野王妃と内乱を避けて海路からこの地に上陸し、潮にぬれた帆を広げて干したところから、「ほひろげ」と言い、発音がなまつて「もひろげ」となつたという。

また古代人の衣の「裳」（腰から下にまとつた衣）を干したともいう。すぐに鞍を掛けて干したという「鞍掛」という地名もある。

◆ 鳴野（しぎの）

小丸川口北岸の鳴野は、王妃「之伎野」が住んでいたところという。「之伎野」妃は大年神社の祭神である。比木神社は母君に会うため一年一回、十一月四日に神幸なさる。ゆかしい情愛の感じられる地名である。

伝説や説話に関係のある地名の続きを書いてみる。

◆ 神祭野（こぜの）

宮田川にかかる二本松橋を渡って南九州大学に登って行く坂を神祭野坂という。登り詰めた右の台地一帯が神祭野である。水谷原の東の農地一帯である。この地域の中央部に昔は大きな松があり、大部分が原野であった。この地方の支配者（近世では高鍋藩主）が、天の神、地の神（天神地祇）を祭る行事がここで行なわれた。神を祭る野であったのである。中国の思想の中に、天子の祭天の考え方があつた。それに倣つたものであろうか。「かみさい野」であつたが、「かみ」は音便で「かう（こう）」となることは神戸（かうべ）の例でわかる。「さい」が約音で「ぜ」に転じたのである。このような音韻の変化は日向方言には多い。

◆ 雲雀山（ひばりやま）

神祭野の東が二本松、南が雲雀山である。二本松はその名の通り巨大な二本の松があつたところである。昭和二十年の台風で倒れた。雲雀山は優美な名である。これは中将姫の伝説に基づく地名である。少し話が長いから次回まで続くかもしれない。

雲雀山観音堂に、正徳六年（一七一六）に、妙心寺派の僧海桃和尚の刻んだ中将姫の木像が祭られている。台坐に「三慧境広 弘誓海深 悲智無碍 月照波心。」というげが記されている。これについて、同地区の故老の話をまづ伝えよう。

「これは中将姫が腰掛けた姿の木像ですが、父祖代々の語り伝えを私が聞いておりますところは、その昔、江戸の雲雀ヶ丘いうところから、中将姫が空中を舞って来られたそうです。その頃二本松の下は、日渡し（樋渡）のところまで川で、一日に一回渡し船が通うて二本松の下に着いていたそうです。その渡船のコースに沿うて中将姫が舞い進んでいたところ、二本松に袖が触れたので舞い降りられたそうです。それでそこに像を祭るようになったそうです。雲雀ヶ丘から来た中将姫の縁でこのあたりを雲雀山と呼ぶようになったそうです。」

この話はバリエーション（変形）が重なっているようなので、次回に少し説明を加えてみようと思う。

◆ 雲雀山（つづき）

前回、雲雀ヶ丘から来た中将姫の縁でこの地名が出来たと伝えられることを書いたが、これについてもう少し説明を加えておきたい。

中将姫というのは、もともと伝説上の人物である。奈良朝時代、藤原豊成の娘で、父が政敵のために退けられた後、当麻（たいま）寺に入って如法と号し、蓮の糸で観無量寿経の説相を織り出した曼荼羅（まんだら）を作ったという。一説には、継母照日ノ前のために、大和の雲雀山に捨てられ、無常を觀じて当麻寺に籠って織ったともいう。その伝説が能楽「雲雀山」「当麻」などに作られ、浄瑠璃にも並木宗輔の傑作がある。能楽「雲雀山」は世阿弥作である。右大臣豊成は、ざん言を信じ、家臣に命じて我が娘中将姫を殺させようとしたが、家臣は乳母侍従と共に大和紀伊の国境雲雀山に娘を隠して育てた。その後豊成は狩に出てはからずも乳母に出会った。乳母侍従は、娘を思うあまり狂乱しているのである。豊成は前非を悔い乳母に導かれて姫の庵を尋ね連れ帰ったという曲である。

これがどうして高鍋で地名になったのか。高鍋藩では、第三代藩主種信公以来能楽が盛んであり、種信公は特に能楽を好み、上方から梅村次右衛門外幾人も能役者を招聘し、隠居後は隠居所を御屋敷（荒川彰氏宅の北側）に造り、能楽堂も設けていた程であった。道具小路の故藤田永明氏の祖先藤田八兵衛は、種信公に召抱えられた笛師で、今も笛一管と貞享四年の「下懸内旅本」数巻が伝えられている。また七代種茂公の時にも能役者橋本源蔵等が召抱えられている。

雲雀山の地名は、能楽の曲名と其中的「姫捨松」を二本松にことよせて出来上がった地名であろう。海桃和尚の刻んだ中将姫の木像に記された正徳六年は五代種弘公の時代である。このころまでには既に雲雀山の地名の出来上がっていたと見てよいであろう。

高鍋における最も文学的な優美な地名というべきである。



中将姫木像



宇治橋昇さん宅入り口にある雲雀山観音堂

◆堀の内(ほんのうち)

◆久保田(くぼた、元は窪田)

◆上地頭用(かみじとうよう)

歴史上の事実や、史跡が地名となっていることもかなり多い。堀の内、久保田、上地頭用という小字もそれに当たる。

「堀の内」は、宮田川河口の南岸、国道十号線の東側の老人ホーム附近の小字である。「堀の内」という地名は、日本全国至るところにある地名。中世時代の地頭(じとう)の館(やかた)は、外敵の襲来に備えて堀をめぐらした。つまり「堀の内の地頭の館」の遺跡が地名として残ったのである。「泣く子と地頭には勝てぬ」という諺がある。地頭は、平安朝時代の荘園(貴族の私有地)の管理人をいうのがその起こりであるが、文治元年(一一八五)源頼朝が、行家・義経を追捕し、全国の平和を維持するという名目で勅許を得て、全国の荘園や公領に源氏の家人(けにん)を地頭に任命し、絶大な権力を持たせ、日本の集権を確立したのである。

高鍋町の平坦部地域は、小丸川と宮田川によって、幾千万年あるいは幾億年もの間に作られた三角州である。小丸川は暴れ川で、洪水が起こるたびに流れが変わり、あちらこちらと幾筋も流れがあり、中州があり、一面に葦や萱が繁り、人の住める場所ではなかった。最も安全な場所は堀の内あたりである。台地も安全ではあるが水に乏しい上に何かに不便である。堀の内あたりは洪水の被害を受ける心配もなく、小丸川と宮田川の河口と海岸は最も有用な船による通路であった。西の方には、標高七一メートルの高岡山―通称護摩さん山―があり断崖となっている。「館」を造るには最も地の利を得ているところであった。因みに、高岡山の東端、今の南九大の正門前には、藩政時代の沿岸監視所があった。「鞍掛遠見番所」と呼ばれていた。

「堀の内」の南が久保田である。「窪地の水田」の意味であるが、当て字で「久保田」と書いたのであろう。

「久保田」の更に南が「上地頭用」という小字である。「地蔵坂下」に続いている。その名の通り、地頭直轄地(多分水田)が、上(かみ)と下(しも)とにあったと思われる。上とは館に近いところという意味であろう。従って「下地頭用」もあったはずであるが、今ではどこであるか分からない。

「地頭」という語のついた地名は、歴史的に重要な地名なのである。

◆ごまさ(高岡)

小字は高岡と言い、南九州大学の南に当たる地域。最も高いところは標高七〇米余りあり、海を俯瞰(ふかん)する高い地形から名付けられた地名であるが、老人の間では「ごまさ」という方が通りがよい。「ごまさま」の約音である。今から一九一年前の寛政五年に、恵成院という僧侶が、高岡の最も高いところに十二間四方の護摩法壇場を設け、藩のための祈願所としたところからこの名が起った。護摩とは梵語の焚焼の意、密教で乳木(にゅうもく)などを焚いて祈願する修法(ずほう)で「ごま焚く」という。昔は、藩内の安全や、雨ごい、暴風の被害の起こらぬように二百十日に例祭を行ない、多くの村々の人がお参りした。その風習は昭和の初めごろまで続いていた。明治四十二年に雲雀山村内の熊野神社をここに移して祭った。

◆妻道南(つまみちなみ)

上永谷の西の地域。妻道は稲荷西という小字との堺を東西に走る細い道という。この道は東に進んで肥後屋敷から地蔵坂下を通り、昔は宇治橋嘉利氏の所から浜に出る道があった。この道はずいぶん大昔から、西都市の妻神社(つませまんさ、または、おせまんさ、という)が毎年七夕祭の前日「浜くだり」をせられる道であった。現在もこの行事は行われ、嘉利氏宅の東の椎の木の下が斎場である。昔の妻神社の浜下りの道は、一ッ瀬川の祇園の渡し、祇園原、西畦原、東畦原、新山毛作を通ってこの道に出たのである。今は車で別な道を来られるが、地名は歴史を伝えている。

歴史上の事実による地名 (三)

◆ 前古場 (まえこば)

◆ 蓑江野地 (みのえのじ)

「前古場」は「上永谷」の東に当たる地域。昔は焼畑 (やきはた) 農業が行われた。山野に繁った雑木をすべて切り倒して焼き払い、野稻、ひえ、そば等を作る原始的農業である。その焼畑のことを「古場畑」という。前古場というのは「以前に古場畑であったところ」という意味であろう。

「蓑江野地」は越ヶ溝の東にある字名である。「野地」は開墾すれば畑になる荒地のことである。古い文書 (もんじょ) に「打開」 (うちひらき) 一反とか二反とか書いてあるのも、「開墾適地」の意味で「野地」と少しニュアンスの違いはあるが同意語である。開墾地は開墾後一定年限は無税である。

「野地」は一定の宅地に付随して支給される開墾適地で、例えば城下町としての高鍋の商店街に本ヶ畝の宅地 (間口五間、奥行二十四間) を購入すると、町から遠く離れた高台地に野地畑三反半が支給される規定になっていた。半ヶ畝 (間口二間半、奥行二十四間) は一反半。そこに野菜などを作ることができた。「蓑江野地」は蓑江に屋敷を持った者に支給された野地畑のあったところの意味である。藩政時代に売買の許された土地は、高鍋の商店街の屋敷だけであった。その他の土地は藩から支給されるもので個人の所有権は認められず、従って売買も出来なかったのである。商店街の者に与えられる野地畑とは全く別種のものである。

昭和五九年八月発行・高鍋町議会だより No. 一八

歴史上の事実による地名 (四)

高鍋町にはお寺の名を地名に残している所が多い。南高鍋の太平寺・光音寺、上江の飯長寺・長法寺下・仙蔵寺、持田の東光寺・正祐寺である。

◆ 飯長寺 (はんちようじ)

平原の西、金刀比羅神社や変電所を含む地域の字名。金刀比羅神社の登り口の平地に、山伏宗の鈴峯山飯長寺があった。城間の地福寺の末寺で、開いた人は源頼法印 (げんかんほういん)。明治三年廃止された。山号の鈴峯山の扁額は金刀比羅神社に今も残っている。椎木郷学校創立者である坂田稻太郎

翁の記念碑がある。

◆ 長法寺下 (ちようほうじした)

山王の長法寺池の東の低い地域の字名。長法寺池の北岸の小高い所に日陽山長宝寺があった。長法寺はこの長宝寺のことであろう。今は墓地になっている。その一隅に堂宇の跡があり、その附近から二センチ直径くらいの偏平な石に法華経を一字ずつ墨で書いたものが昔は沢山あった。一字一石経 (いちじいつせきぎよう) といわれるもので、室町時代に始まった経塚だといわれる。長宝寺は慶長年間に、明星院という僧侶が建てた真言宗の寺。明治二年廃寺。長法寺池 (堤) は元禄七年 (一六九四) 河内山清八が五〇〇〇人の人足を使つて作つた灌漑用の堤。清八は秋月左都夫 (オーストリア大使) の祖先である。

◆ 仙蔵寺 (せんぞうじ)

字飯長寺の北に船塚がある。船塚は古墳ではないが墓地になっている。船塚の附近は船塚回りという字名である。その西が仙蔵寺という字名である。その一隅に仙蔵寺という寺があったらしい。今もその跡が見られるそうである。この寺は高鍋藩寺社帖には全く見えない。昭和五年の宮崎県史蹟調査報告第五輯にも「宗派並びに廃止不明」と報告している。秋月氏が高鍋に来るずっと以前の中世期の寺院であろう。してみると仙蔵寺という字名は歴史の証人である。地名の大切な所以である。地名の安易な変更の恐れなしといひ今日、留意したいこと。

◆ 東光寺 (とうこうじ)

高鍋大師附近一帯の字名。字名の本となつた瑠璃山東光寺は真言宗のお寺。本尊は薬師如来で、中興開山は今から三九〇年前 祐義法印 (ゆうぎほういん) という僧侶。明治三年廃寺。東光寺公民館がその跡。入り口に町指定の文化財十三仏板碑 (いたび) がある。室町時代末期の作。高さ一・六メートル、幅三六センチ直径十二センチの円内に一仏ずつ十三仏の浮彫があり、下段に南無大師遍金剛と大願主権大僧大都、永禄五天 (一五六三) とある。寺跡の西上段に一堂があり、その周囲に長宝寺と同じく、一字一石経が見られる。経塚である。大切にしたいもの。

歴史上の事実による地名（五）

◆ 太平寺（てへじ）

たいへいじの約音。養国山皇徳太平寺という曹洞宗の寺院が墓地の側にあった。秋月氏より前の高鍋城主土持氏の菩提寺で、今も土持氏の墓がある。五十九年前の大正十五年に、土持氏の子孫が墓探しにやって来たのが動機で、岩村真鉄（まがね）という人が探し出したのである。今は町指定の文化財になって太平寺の老人会が大切に保護している。高鍋の最も古い寺で、養老三年（七一七）建立。明治三年廃寺。中興開山は無外円照大和尚で住職の名も二十八代まで記録されている。島津義久の家臣で宮崎城の城主であった上井覚兼の日記の中に、太平寺の住職のことが出て来る。太平寺にあった仏像の一体が今でも円福寺に伝わっている。



◆ 光音寺（こうんじ）

こうおんじの略音。光音寺橋あたりの字名。光音寺という寺院の跡が、光音寺橋の南詰めの西の山中にわずかに残っている。太平寺の支院で禅宗。前記の上井覚兼日記上巻に次の通り光音寺の住職のことが書いてある。当時一流の文化人であった覚兼が、住職に対して尊敬語を使っているところから見ると、光音寺の住職という人は、余程識見の高かった人物と見てよいようである。

「天正十一年（一五八三）閏正月十八日、財部（高鍋）より光音寺来られ候。茶・木綿二預り候（頂戴の意味）。」

高鍋藩の記録から見ると元禄の初めごろには既に廃寺になっていたようである。

◆ 牛牧（うしまき）

南牛牧・北牛牧・牛牧原

今年は丑歳（うしどし）。旧式の言い方では乙丑（きのとうし）の歳。丑を地名としているのは「牛牧」である。牛牧は大字上江と大字持田の二箇所にある。私どもが牛牧と言っているのは、黒谷坂を上がったところに広く開ける地域であるが、正確に言うところ、ここには南牛牧と北牛牧と牛牧原の三つの字があり、私達はそれを総称して牛牧と言っている。黒谷坂を上がったところが大戸の口（うとんくち）その西が南牛牧、その北が北牛牧で谷坂から上がったあたり。南北牛牧の西が牛牧原である。その西が小並。牛牧地区とそれに隣接する地域を総称して「うわの」（上野）という言い方もある。松本・平原あたりの低地に対して洪積層台地をいうのである。洪積台地を宮崎県では「はる・ばる」と言い「原」と書く。地名に付く原を「はら・わら」と読むのは、佐土原・広原ぐらいで、その外はほとんど「はる・ばる」である。（茶臼原、牛牧原、毛作原等）

大字持田の牛牧は鬼ヶ久保の北である。

牛牧の名の由来は、記録はないが牛の牧場で、秋月氏が来る以前からの地名であろう。高鍋藩の牧畜は有名であるが馬が主体で、牛は、弘化元年（一八四四）に高鍋に一六八頭いたという記録があるに過ぎない。



牛牧台地風景

◆ 優美な地名

桜谷・萩原・柳・茱萸原・菖蒲池など

日本人は美的意識が高く、優美な名をつける名人だという。源氏物語五十四帖の巻の名のときは最上である。高鍋の先人たちも、その土地の特徴的な植物や、地形を優美な地名として残している。

桜谷(南高鍋)萩原(北高鍋)柳(持田)まことに優美な名である。柳、桜は春、萩が露に濡れている風情は秋。茱萸原(ぐみばる)(蚊口浦)には、あるいは食欲を感じる人があるかも知れないが、あれは食べるものではなくて、見てほのかな赤を味わうべきものである。ナツグミ、アキグミ、ツルグミ、海岸にはマルバグミがある。白色の小さな四弁筒形の花を開く。若い人はいざ知らず、老齢の人達にはそれぞれ思い出があらう。茱萸原は宝酒造あたりの地名であるが、今でもその東の鉄道線路の東にはグミの木がある。

茱萸原のあたりを「しぼら」ともいう。「しぼら」は「芝原」(しばはら)の転音である。

植物の名をつけた地名には、青木、楠木、(上江)少し実用的であるが、松山、檜原、(以上持田)がある。前にも挙げたが、菖蒲池も美しい地名である。

小字の中の小さな地域の名を小名(こな)というが、中鶴の一部に「椿本」という小名がある。



ぐみばるにある「琴弾の松」

◆ 生き残った地名 岸の上村

地名は、地形や土地の状況、そこに存在する特徴的な物に基づくものも多い。三百年ほど前の書類に、米が五六七石八斗六升も穫(と)れる「岸上村」という村が持田村のそばにあると書いてあるので不審に思った。そんな村のことは話にも聞いたことがなかったからである。読み方も「きしがみ」か「きしうえ」か分からない。いろいろ調べていく内に次第にわかって来た。司法書士の緒方真樹氏の父上から頂いた「高鍋町小字名」の中の「持田の部」に「岸の上」一三七六〜三三二番地と書いてあったのが手掛りであった。わかったことは次の通りである。「きしのうえむら」と読む。現在の五反田・中尾から坂本・池端・元ノ下・柳丸一帯を経て黒瀬・小長田・松山・久保田までを含む地域を、嘉永の終り(一八五三)までは「岸の上村」と言っていたのである。現在は持田保育所のそばに「岸の上」という小字名として残っている。



持田保育園、東光寺が見える

それも耕地を整理し地番を統合したため、二二一九番地一筆だけが岸の上の字名で生き残っていたのである。坂本から勝利に通ずる道のそばである。この道の南側は道から二メートルも低く、かつては小丸川の川岸であったことを物語っていて、ここはその名の通り岸の上である事を示している。先に挙げた地名は皆、かつて小丸川の川岸の上であったのである。一筆だけ残ったのは偶然のことかも知れないが喜ぶべきことである。地名が失われ
ると歴史をたどる手蔓を失ってしまった。行政に携わる人は、そんな点まで配慮してほしいものである。

◆ 尾崎 (おさき) ◆ 松ヶ鼻 (まつがはな)

前回地形を示す地名として「岸の上」のことを書いたが、そのすぐ西に宇尾崎がある。砂利会社が台地の土を取ってしまつたが、その東の突端の部分が尾崎である。土を取ったところ、つまり古墳のあつた台地は字中尾である。中尾の突端であるから「尾さき」＝「尾先き」＝「尾崎」なのである。近世の初めに尾崎城のあつたところである。この附近からは、遙か古代の石器時代から縄文・弥生・古墳の各時代の遺物や遺構が検出され、高鍋では大事な所であつた。ここを「尾崎のはな」ということがある。「はな」は「まがりつばな」「出つばな」「はな先」などの「はな」「はな」と同じで「端」はし、先端の意である。「崎」の上にさらに「はな」を付けるのは意味が重複するから適当な言い方ではない。

「はな」の付いた地名に「松ヶ鼻」がある。「松ヶ鼻」は大字上江と大字持田の二ヶ所にあつて、しかも地続きで衛生センターの南である。この地名も地形から付けられた名で、昔はこの辺は中洲で松の木が茂つていた。つまり「松の生えた中洲の突端」の意味である。鼻は突端の意味の宛字である。「ヶ」は通常「が」と読み、「の」の意味で鬼ヶ久保・牛ヶ道(以上持田)越ヶ溝(南高鍋)の「ヶ」と同意である。「松ヶ鼻」が二ヶ所あるのは、同じ中洲を大字別に二分したためであろう。



持田保育園の西にある尾崎

◆ 掘川下 (ほりかわした) (大字持田) ◆ 安蔵 (あんぞう) (大字上江) ◆ 堂ヶ瀬 (どうがせ) (大字上江)

「松ヶ鼻」の北の字名は「掘川下」で衛生センターがある。小丸川の流れを挟んで北岸も「掘川下」で共に大字持田であり、元は地続きであつたことを示している。上江と持田の境であることに注意したい。掘川とは、川の流れを誘導するために掘って造つた川のこと、一種の運河である。「下」とは、その運河の下流のことであるから、「しも」であるが、意味が分からなくなつて「した」というようになったのであろう。これは安蔵と関係がある。

「安蔵」は川田の北端から小丸川岸までであるが、古くは対岸までであつた。対岸の竹嶋との間に潜水橋(もぐりばし)が架つている。このの瀬を「安蔵の瀬」と言つて鮎が多い。竹嶋の瀬とは言わないから、この瀬まで安蔵であつたのである。ここは二百年以前は安蔵村であつた。ここに正念寺(しょうねんじ)という浄土真宗の寺があり、泉州境の慈光寺の末寺であつたが、寛文年間廃棄された。真宗弾圧の手始めと見てよいのかも知れない。

そのころ小丸川は、木ノ瀬から高城の藪を通つて五郎丸の西を北に向かつて流れ、切原川と合流して西別府台地の下を東に向かつて流れていた。竹嶋・五郎丸は大字上江である。それが天明五年(一七八五)七月十一日の暴風雨大洪水で安蔵村を押し流し、馬場原下、水除、正ヶ井手方面に流れが変わつた。白水紋助の屋敷は安蔵村にあつたが、屋敷際まで崩れ危険なので上江お茶屋のそばに代り屋敷を下さつたと、続実録巻五に記録されている。「掘川」はその流れを切原川下流に誘導した人工の川である。

「堂ヶ瀬」は、安蔵と掘川の間で、何かの祠堂があつたところから川瀬に名付け、やがてそれが字名となつたのであろう。ここに旭大合織がある。



◆崩戸（くえと）

◆木ノ瀬（きのせ）

◆老瀬（おいせ）

「安蔵」追記。前回「安蔵」で大事なことを落とした。それは安蔵に安蔵寺があつたことである。日向地誌に「安蔵寺跡」のことが書いてある。宗派も廃棄の年月も不明、地誌の著者平部 南が調査に高鍋に来たのは明治十一年六月十二・十三日であつた。そのころはまだ安蔵寺跡があつたと記している。現在はその跡も分からない。安蔵寺があつたから安蔵の地名ができたのだろう。安蔵は仏教的な用語の匂がする。

崩戸は安蔵より上流の川岸で、青木の台地が小丸川に崩れこんだ斜面と平地のことである。青木の東端の下から宿之坂橋までの細長い地域である。「崩え処」（くえと）の意で、「処」（と）に「戸」の字をあてたので、山処（やまと）に大和をあてたのと同じである。宿之坂の曲がり角の、字野首の北端が崩戸に接する平坦なところ、野首山（町水道貯水池のある山）の清水が湧くところに、明治の初め清水小学校があつた。

「老瀬」「木ノ瀬」は大昔の川の瀬の名残である。大昔、大洪水の時、木城蛇が淵から吐き出された小丸川の奔流は、仁君谷から突き出ている岩に激突してはね返り、比木の下から岩淵に流れて淵になり、山裾を椎木へ回り、一戸瀬に出て老瀬、木ノ瀬を流れ、下鶴（語源は下水流）を通じて切原川と合流し東へ流れていたことを地名が示している。「老い瀬」は「追い瀬」（追うように早い瀬）の意であろう。小丸川流域の平地はすべて悠久の昔から、小丸川が氾濫し土砂が積み重なってできたのである。高鍋の地名は川の流れに由来するものが多い。



老瀬から宿の坂を望む。（老瀬ポンプ場付近）

◆馬場原下（ばばんはるした）

◆水除（みずよけ）

◆正ヶ井手（しょうがいで）

天明五年（一七八五）七月の台風大洪水で小丸川は安蔵から馬場原下へ流れを変えてしまったが、記録（続本藩実録）によると、その対策も取られないのに翌天明六年には、三月、六月、八月と三回続けて台風が襲来し、馬場原下から現在の西小学校プールのあたりにかけて大川になってしまった。そのままでは、次の大洪水では平原の上小路、中小路、下小路の北側までも崩れこむかも知れないという恐れが出て来た。三回目の暴風雨は旧暦八月二十九日で特に烈しく、舞鶴城内の破損も幕府に届け出なければならぬほどひどかった。急いで護岸工事をするため、一反歩に二人の割合で二八〇人を出役させたと記録されている。しがらみを組み、竹を編んで蛇籠（じやかご）を沈め、笈牛（すいぎゅう）（流水をさける木組）や川倉（かわくら）（同上）を組んで水防工事をするのに、永い期間かつたに違いない。西小学校の敷地に当たるところが「水除」（護岸工事場所）という小字である。馬場原の財津吉之氏の屋敷の北東には、十数年前までは川跡が広い池になって残っていて、大きな鮒や鯉がたくさんいたものである。今は大きな排水路が造られ、その北側に葦が生えていて昔の面影をわずかに残している。

西小学校（水除）の東の窪地が「水除下」、西中の南が「正が井手」である。高鍋では灌漑水路のことを「井手」という。正が井手の地域は位置がやや高いので井手を造成したのである。想像をふくらませると、庄兵衛が正蔵か、「しょう」の名のつく人が井手を作ったのかも知れない。



西小北側の排水路

◆町（まち）（一）

しばらく地形に基づく地名について書いたが、年が改まったところで、町（まち）について書いてみよう。

町は高鍋城下町の名残りであるが、今から三八一年前の慶長十二年に祇園社（八坂神社）が建立され、毎年六月十三日（旧暦）に大市（いち）が立つようになったと、古い記録（見聞年代記）に見えるから、そのころ既に城下町が形成されていたのである。古い記録に見える町名を挙げると、下町・十日町・六日町・八日町（後の中町）・上町・本町・松原町があり、下町から祇園社へ行く下横町（後に祇園町・八坂町）、八日町・上町の接するところから東に続く上横町、松原町から西へ続く洗町（荒井町とも書く）がある。

旭通りが開通したのは、多分明治二十三年に、高鍋穂北間の道路が完成した時で、大正通りから祇園町にいたる道路は、明治四十四年十二月四日に請

負工事の入札が行われていたから、その翌年ごろ完成したのであろう。十日町・六日町・八日町の町名は市（いち）の開かれる日を表している。記録（町奉行目安）によると、市日（いちび）は朔日（ついたち）・六日・十日・十六日・二十日・二十六日で、上町・八日町・六日町・十日町の四力所で順番に開かれた。

町屋敷には一力畝があり、一力畝は間口五間、奥行二四間（一一〇坪Ⅱ三九六坪）、半力畝は間口二間半、奥行二四間（六十坪Ⅱ一九八坪）で、藩政時代にも売買ができた。



昔、市が開かれていた六日町

◆町（まち）（二）

在方（ざいかた）（ぜかた・農村）に対して、町浦津という言い方がある。



浦は蚊口浦、津は美々津で、住民は主として水主（かこ）（水夫）であり、代官支配であった。町には、都農・高城のような代官支配の野町（のまち）もあったが、高鍋城下町は町奉行支配であった。約三百年前に堤甚五左衛門が初めて町奉になった。町奉行の指図を受けて、小部当（こべとう）一人、乙名（おとな）二人が町行政を執行し、小部当の配下には警察権を持つ町同心八人がいて、市日や祭の夜は街の治安のため巡回した。たて筏の入口には立派な冠木門（かぶきもん）があり、その前は高札場になっていて、住民に対する「お触れ」が時々書き出された。横筏の入口は、町から見通しにならないように、互い違いの土手が築かれていた。その名残で現在も千手五雪堂の北側の道は曲がっている。町の大半が焼失してしまう大火が度々が発生したのは萱ぶきであったせいもうろう。町役人である小部当の家がやと瓦ぶきになったのは、二三〇年前の明和六年であるから、一般の商店が瓦ぶきになったのは、ずっと後のことであろう。町の人々は火事にはひどく心配した。元禄九年（一六九六）の夏、町の西に安置されていた三宝荒神を敷地が狭いというので祇園大神の西に新しく祭り、今の火産霊神社は明治四年村社となった由が永友因幡の記録に見える。消防組織・防火設備も次第に整備された。すべての家に井戸があるのも高鍋城下町の特色である。

◆ 道具小路 (どんくじ)

◆ 大将軍下 (でじょごんした)

道具小路は城下町の町割りをする際に、細工物職人の居住地として定めたものと思われる。南端の元祇園墓地に祇園社跡や庵地があったこと、古町という地名が残っていることから考えると、秋月氏時代以前の野町の跡かも知れない。諸道具を作る細工人の住む小路の意味である。

それにしても「こうじ」が「くじ」と約音になるのは理解し易いが、「どうぐ」が「どん」という撥音になるのは説明が容易でない。「くじ」のK音の影響である。ここには興味深い小名が残っている。田ノ上、順礼道(堂)、古町、中間小路、一寸小路、具足小路、鍛冶道具小路、上下道具小路(かみしたどんくじ)、下道具小路(したどんくじ)等である。(場所は町史三三三頁参照。)職人は細工方という役所に所属していた。職種は実に多種多様であった。

少し紹介する。帳付師(襖・屏風)、刀鍛冶師、鉄砲かじ師、鉄砲台師、弓師、弦師、ゆがけ師、具足師(鎧)、笠師等。

道具小路東の多賀神社は古い時代から「大将軍様」(でじょごんさま)と言っていた。その東の低い所という意味で「大将軍下」という。郵便局西側の道路は、食糧事務所のそばまで、「大将軍池」という池であった。蓮と菖蒲が繁り鯉や鮒がよく捕れた。多賀神社の祭神はイザナギノミコトであるが、大將軍は朝鮮の神で現在でも朝鮮各地にある。

大体、高鍋周辺には朝鮮特に百済(くだら)関係の地名が多い。比木神社の祭神福智王の関係かもしれない。



◆ 道具小路の小名 (一)

町立図書館の敷地は明倫堂の創立当時の管理責任者(校長)河辺氏の屋敷で、そこに保存されていた道具小路の屋敷割図(高鍋図書館所蔵)によつて、道具小路の小名(小字より更に狭い地域の名)について細説しておきたい。

○ 一寸小路 (いっすんくじ)

駅通りを東町から道具小路に入ったあたりで黒岩商店の手前まで。一寸は約三センチの長さで「短い」という意味だろう。

○ 具足小路 (ぐそくくじ)

駅通りを東へ進んで黒岩商店からベーカリーショップまで。図によると、現在の高鍋プロパンから北に入り円智寺のそばの墓地に達する小路の東側に、具足師(甲冑職人)が住んでいたので小路の名が付いたと思われる。

○ 順礼道 (堂) (じゅんでど)

じゅんれいどうのなまり。道とも堂とも書かれているが、本来は堂であろう。萱嶋商店から北に入る小路で、田ノ上墓地の入り口あたりに祠堂(ほくら)があり、順礼が泊まつたりするところからこの名が出たのであろうか。

○ 田ノ上 (たのうえ)

しんきん通りから順礼道に至る地域で、「上」には、ほとり・あたりの意があり、まわりが水田でかまれていたからであらう。古くは高鍋教会の西に八大龍王が祀られていた。



○ 古町（ふるまち）

高鍋キリスト教会から北に入る小路である。南の祇園社跡（本祇園）やその他の周辺の状況や、古町という名称から考へるとこのあたりは、秋月氏就封以前の野町（のまち、在方の町）であったのかも知れない。

○ 中間小路（ちゅうげんくじ）

古町の東にある小路で、古くは円智寺から住友生命までは道がなく円智寺から北へ通じ、中間（なかほど・なかごろ・ちゅうかん）にあった小路である。円智寺は新しい寺で、大正の終わりに大泉氏が菖蒲池の椎木家（児湯病院の場所）で勤行を始め、本祇園に移り、後に現在地に開基したのである。



昭和六三年二月発行・高鍋町議会だより

No. 三二

◆ 道具小路の小名（二）

○ 元祇園（もとぎおん）

もと祇園社のあったところの意味である。道具小路南公民館の西側に隣接して竹の茂っている所に祇園社が祭られ、その西に庵地が建っていた。「見聞年代記」という古記録によると、種長公が慶長十二年（西暦一六〇七）（本藩実録には慶長十三年と記し一年ずれている）菰江の今の場所に移され、明治二年に八坂神社と改称された。もとの祇園社は慶長年間よりずっと以前に建てられていたものと思われる。もとの祇園社の南部一体は広い墓地で「本祇園墓地」と呼ばれ、藩学の祖山内仙介や明倫堂教授の日高耳水夫妻、連合艦隊司令長官小沢治三郎その他著名な人々の墓があり、田ノ上、高月、蚊口の

墓と共に高鍋四大墓地の一つである。

○ 鍛冶道具小路（かじどんくじ）

黒岩商店から南に入る小路の名で、昭和の初めごろまでは、「高鍋不動産」のところから黒岩商店の南の裏を通つてこの小路に通じていた。この小路に岩下姓の著名な刀鍛冶師三家の外、鉄砲鍛冶師、鉄砲台師等が住んでいたところから、この小路の名となったのである。岩下家の刀鍛冶小屋は貴重な文化財として町歴史資料館の敷地に移転保存されている。今一つの岩下家の祖、盛久は菊紋を銘に切ることのできる優れた刀鍛冶師であった。

○ 上下道具小路（かみしたどんくじ）

○ 下道具小路（したどんくじ）

「たかなべマルハチ」の駐車場の角から北に入る道が上下道具小路、逆に南に入る道が下道具小路である。上下道具小路の北端は、多賀神社（通称はデジョゴンサ、大将軍様）の境内の東側を回って宮越地区への道に続いていたのである。

（備考）

「中間小路」について、「仲間」（ちゅうげん）が住んでいたところではないかというお尋ねを頂いた。大方の疑問であろうと思うが、「仲間」は武家に住み込んで雑用をする者であるから、通常自宅は持っていないからである。



祇園社あと

◆ 小丸（こまる）と（おまる）

石井秀隣氏から「小丸」の語源を尋ねられた。説明が少し面倒である。

小丸川の名の起こりは、大字持田の小字「小丸」（こまる）であろう。元ノ下と浜河の西北の小字で元ノ下の水天宮を通り過ぎ、木城町高城に行く堤防上の道に上がる道の北側である。その西に大阪下（うさかんした）、古宮田、柳丸がある。大昔、小丸川が切原川と合流していた頃、一つの支流が「こまる」あたりを流れ、元ノ下と坂本坂との間を通って本流に合流していた。その名残が元ノ下の池で河跡湖（かせきこ）である。今は形ばかりで溝になってしまった。川の名は、そのあたりの地名で呼ぶのが通常である。高城川・切原川・宮田川などで、元は「こまる川」で、後に「おまる川」となった。私の見た最も古い記録は貞享元年（一六八四）の物で漢字で書いてあり、こまるかおまるか分からないでこまる。これは推定に過ぎないが、この流れは支流で小丸の語源は「小まわり」ではないだろうか。柳のところを回るから「柳まわり」（柳丸）であろう。さて、北高鍋の小丸については古い記録に「小丸垂口（たれぐち）」と書いた例が見える。「垂れ口」は「下っていくところ」の意で、小丸川が小丸川原へ下って行く出はざれたところで、自動車学校に下っていく橋の手前のあたりを指すのであろう。



旧 10 号線の小丸地区

それが後には城下町から小丸川へ行く道附近を広く指して小丸と言ひ、通り路を指して「小丸小路」と言ったのであろう。



「こまる」と言われた元の下地区

◆ 池 端（いけんはた）

◆ 古 河（ふるかわ）

◆ 元ノ下（はげんした）

◆ 浜 川（はまかわ）

持田の小丸（こまる）の南に池端、古河、元ノ下、浜河がある。池端は前回元ノ下にある河跡湖（かせきこ）として説明した池の周辺である。元ノ下の東の低地で水田地帯になっており、南端は小丸川に接している。この低地は前回述べた通り、ずっと昔、小丸川の支流が流れていて、それを古河と呼んでいたに違いない。その名残で「古河」という小字名となって残っているのである。それを証拠立てるように「古河」という小字は「池端」を挟んで、坂本側と元ノ下側と古河の両岸の場所に分かれて残っている。

古河と呼ばれる流れの洪水の度ごとに、坂本坂上（計塚の突端）の絶壁は崩れ落ち、はげ跡のように赤茶けた地肌を曝したことであろう。元げ落ちた絶壁の下、中洲の集落を「元ノ下」と呼んだと思われる。

元ノ下地域の北西の端に「浜川」という小字がある。浜辺のような趣でもあって「浜川」の名が起こったのであろうか。又、元ノ下の西側の中ほどに「待居」という小地域の小字があるが、語源は全く見当がつかない。



元の下周辺

◆切原（きりばる）
◆打切（うちきり）
◆松山（まつやま）
◆久保畠（くぼはた）

「切原」は柳丸の南部にある小さな村で、字名ではないが古くからよく知られた地名である。東の入口に比木神社の神幸のある美年神社がある。「年」とは穀物、特に稲のことで「美」は美称である。境内に力士「名貫川」（早助）の顕彰碑がある。切原川が村を西から南に回って流れ、切原橋が架り下流に切原小橋が架っている。数年前までバスは神社の南側を走っていたが、現在は北側に広いバイパスができた。切原橋を渡ったところが、「打切」という字である。「打切」とは「松山」「黒瀬」「久保畠」に続く平地が、切原川と小丸川に打ち切られているところから名付けられた地名で、「打切」の傍の原野が「切原」である。「松山」「久保畠」も土地の状況から名付けられた字名であらう。四百年前の再度の高城合戦を伝えている「高城興亡之記」には、切原・竹嶋・下鶴のことが書かれているが、宛字で「霧原」と書いてある。佐土原藩土越智（おち）某の「佐土原より江戸までの旅日記」に「金原」と書いてあるのは「切原」のことと思われる。薩摩弁では「金原」も「切原」も「きつばる」と発音するからである。その文は、

それより川（尾丸川）をわたり
行程に「金原」といへる所に
いたりぬ。思えば此所は、
かへるさいには、故郷より迎
の者かれいひなどもて来るよ
しなどおもひ出て詠める。「ふ
るさとの使をまつの下蔭に待
ち見ん時や心いかなる。



切原川から集落を望む

佐土原藩の人々の旅立ちには、この金原（切原）まで送り、帰りにはまた此処で「さかむけ」したものとみえる。堤防のなかった時代には、小丸川の上流から川口まで見晴らしが利き、南岸に遥かに高鍋城を見る風光絶佳のところであった。

序でながら、名貫川の墓は、坂本から古坂を鬼ヶ久保に上がる途中の墓地の入口にある。

平成元年二月発行・高鍋町議会だより

No.三八

◆竹嶋（だけく）
◆五郎丸（ごろうまる）
◆五郎丸河原（ごろうまるがわら）

この三つの字地は小丸川北岸であるのに大字上江に所属する。それはこの字地はかつて大字上江と地続きの時期があった事を示している。

「竹嶋」は難読の地名である。町の資料館に天正六年（一五七八）の高城合戦の地形図（文政三年（一八二〇）書写）が展示されている。面倒な考証は省略するが、約四百年前の地形が描かれている。それによると、小丸川は木ノ瀬下から北流し、下鶴の東を流れて現在の西別府橋の附近で切原川と合流している。合流点の下流に「ダケクガフチ」、その南岸に「ダケキ村今ハナシ」と記入され、更に「此川古ハハ流大ナリ。今ハ田地ノ用水ニ取ツテ流少キ也。此川下ダケクガフチ、今ハ其跡ノミノコレリ」と記されている。「今」は書写した時のことである。天正六年十一月十二日は、大友宗麟軍と島津義久軍が高城川原で激戦を交え、大友軍が大敗し、数百人は「ダケクが淵」に追い落とされた。大友軍の戦死者は四千人。島津軍は一千余人。その合同慰霊碑が宗麟原供養塔である。

注意すべきことは「ダケクガフチ」と「ダゲキ村」という二つの書き方である。「ダケクガフチ」は「ダゲクガフチ」かも知れない。日向国史には「墮逆（だげき）ヶ淵」と書いてある。

「ダゲキ」は名詞形、「ダケク」は動詞形、流れが急激に落ち込んで滾（た）ぎりたつ意味らしい。竹嶋はその当て字であらう。

また別の説がある。竹が多く嶋も多くいたからという説である。拾遺本藩実録巻三に次の記事が見える。



竹嶋・五郎丸

「四代藩主種政公が竹嶋、西別府
蟻別府（にしのびゅうありびゅう）
通過の折、ひどく疲弊している様
を見てその理由を尋ねられた。家
老は、特別に負担が重くはないが、
ここは水の涸（か）れ易い所で近年
不作のためと思われます。竹の多い
所だから、竹を自由に利用させたら
いかがでしょう。」と言ひ、当座の
扶助として麥二十俵を支給した。こ
の記事から竹の多かつたのは事実で、
嶋も多かつたかも知れないが、竹嶋
という熟語の地名が成り立つには単
語構成上無理があり、俗説と見るべ
きであろう。

「五郎丸」の語源は明らかでない。住んでた盗賊の名とも言うが根拠がない。
「五郎丸河原」は竹嶋と五郎丸の中間の川原の意であろう。日向地誌の調
査は明治十一年であるが、当時は竹嶋五戸、西別府は二十二戸であった。

平成元年六月発行・高鍋町議会だより

No. 三七

◆ 平 原（ひらばる） ◆ 中 嶋（なかしま） ◆ 鴨 作（かもつくり）

初めは地名をいくつかの類型に分
けて考えるつもりであったが、注文
や質問その他の理由から行きあたり
ばったりになってしまった。類型を
立てるなら右の地名は地形・土地の
状況からつけられた地名と見るこ
とができる。

昭和四十二年の航空写真によると、
小丸川氾濫によって出来た蛇行の地



ミゾゴ（スタリ村）

形がよく見える。「平原」は洪水の
被害を免れるほどの高さの原っぱ
であり、「中嶋」は洪水の中に孤立
する中の嶋であるし、中嶋の北の
「鴨作」は洪水の中に没する場所で
ある。鴨作は「鴨つかり」の音韻
が変化して「鴨つくり」になった
と言われている。鴨のつかる湿地
帯の意である。宮崎県で地名の「原」
は、「はる」又は「ばる」と発音す
ることが多く、佐土原・萩原の如
く「はら」と発音する例は少ない。
平原には藩政時代の小路の名が
多く残っている。南北に走る小路
を東の方から言うとき、下小路（し
もくじ）、中小路（なかくじ）、上
小路（うはくじ）、下道（したみち）
（藩政時代は下道村）、下道から金
刀比羅神社へ行く通りをサシ小路（くじ）（サシは催司又は散司の意、伝達役
の職名）、東平原公民館の南西は小薄村（おんづき）。サシ小路の北の細い通
りを池内小路（いけうちくじ）、（池内姓の家が二軒あった）。その北一帯（三
隅氏宅附近）が藩政時代の平原村である。三隅氏宅前の道から西に出た所が「十
文字」で、北へ進むと木城に行く道、西へ進めば新馬場で谷坂へ通ずる。三
隅氏前の小路の北の地域が片平村（かたへらむら）であった。片平村の道の
北側は最近まで水田で、人家は南側だけであった。高鍋では片側のことを、「か
たへら」と言う。

馬渡氏宅あたりがスタリ村（現在はミゾゴという由、ミゾゴは小溝の意）、
その南から変電所へ行く道と交わる所までが井ノ上である。山下の隋道によ
る井手のほとりの意か。（上はほとりの意がある）

文化十二年ごろの記録に「空ヶ苅」（そらくそん）という地名があり、覚照
寺の北部から平原村の北部へかけての地名であろうといわれるが、ご存知の
方があったらご教示下さい。



サシ小路

平原の西の飯長寺・仙蔵寺という地名は既に述べたので南の地域を書く。なお飯長寺については、高鍋史友会報二十五号に倉掛博志氏の詳しいレポートがある。それを参照なさるよう紹介しておく。

◆松本（まつもと）

変電所前の道から大龍寺入口まで。東は平原から役場へ行く道を境として、西は台地に至る斜面の樹木地帯までがこの字地である。その地名の通り古くは松が繁っていて、秋には殿様が松茸狩りに行かれたという記録をよく見る。安田尚義師は、高月の学校への登校の道草にこの山の中で靈芝を発見し、今も大切に保存していると見せられたことがある。山下（字名）と松本には坂本姓が多い。口碑によると、承久の乱（一二二一）を避けて近江国坂本城（滋賀県坂本、比叡山の東麓）からこの地へ移住して来た人々で、変電所前の日枝神社は、近江の山王権現を移した坂本一族の氏神であるという。ここは史跡が多く、明治初年の廃仏毀釈で焼かれた宝福寺・龍雲寺の跡や、秋月氏初め、三好善太夫、武藤東四郎など藩政時代の重臣や鈴木馬左也などの墓がある。



松 本

◆高月（たかつき）

町役場、税務署を含む地域で、塩田川から役場西正面の道路まで、南は黒谷のシグナルから法務局まで、北は勘右衛門水路と高樋まで。

初代藩主秋月種長公が慶長十年（一六〇五）十一月、高鍋城の鬼門除けに鷹月（たかつき）（真言宗）を建立した。本尊は伏見城の焼跡から現われた

薬師如来木像、後に高月寺に改められた。当時は島田門正面の地域で威儀を正した武士が闊歩し、さまざまな人間模様が織り成されたが、明治初年廃寺となり地名だけ残った。昭和十七年町役場となるまでには、兵賦局、小学校、土族授産場、高鍋製糸工場など幾多の変遷がある。役場の北側から洗町に通ずる道は、古くは木城に至る幹線道路で寛政の奇人高山彦九郎はこの道を通って高鍋城下町に入っている。

◆黒谷（くろだに）

高月の西側で台地に至る斜面の樹木地帯。北は大龍寺入口から南は黒谷のシグナルを経て牛牧方面に上がる坂道まで、南は養護老人ホームの東境までである。シグナルから台地に上がる旧道は、現在の広い道路から七、八〇メートルほど北側で谷底近くの細い道である。藩政時代は城の搦手に至るところで庶民は通行禁止であった。古くは射場などがあり、谷の奥は老木が繁って暗く、地名の黒を連想させる谷合であったに違いない。旧道の中ほどに海桃和尚の刻んだ観音像を祀る祠堂がある。大龍寺は廃寺となったが、秋月家歴代の墓は町指定の文化財として丁寧に祀られ、広い墓地には藩政時代の重臣達の墓が多く、近くに上江郷の郷社愛宕神社がある。



高 月

◆ 畑田（はたけだ）と 小薄（おんづき）

畑田は中央公民館を中心とする広い地域で、小丸の家並みの西に沿う地域から字松本まで、北高鍋と上江にまたがっている。日興建設の南の小川の線から農協までが上畑田、宮崎県酒類販売会社の南までが中畑田、パチンコグランプリまでが下畑田、以上が北高鍋に所属する。上江に所属するのは、町体育館を中心とする地域の東畑田、小薄（おんづき）の池を中心とする低湿地帯の西畑田である。

畑田の名の由来は「畑を水田にしたところ」の意である。ここは慶長年間までは「栗原小路」と呼ばれていた。栗原は穀物の実入りのよい原の意味であって、有名な勘右衛門井手によって肥沃な水田になったのである。勘右衛門水路は此処ばかりでなく、太平寺、中鶴の井手すべてを指し、高鍋水路の大動脈で百八十町の水田を潤した。今は都市計画事業の対象地で、やがて面目を一新しようとしている。地名が歴史を物語ることになるであろう。

西畑田は低湿地帯で畑は無く、中央部に小薄の池があった。池は小規模の河跡湖で、太古に河川の流れていた時期があったことを示している。小薄とは平原公民館附近の地名（小名）で、この地名の見える最も古い記事は拾遺本藩実録の貞享元年（一六八四）六月九日の頃に「をん付」と仮名書で出ている。寛政四年（一七九二）天下の三奇人の一人高山彦九郎が高鍋を訪れ、その筑柴日記に「上江郷小薄村の金丸市兵衛の所へ入りて云々」と書き「ヲ



畑 田（はたけだ）

ンヅキ」と読み仮名をつけている。「小薄」は狐との関係がある語で、「稻荷大明神流記」によると、稻荷神社の使者の雄狐は「小薄」（おすすき）と名付けたという。平原公民館長の倉掛博志の調査によると、平原の金刀比羅神社に合祀の稻荷神社は元は平原公民館西表通り祀られていたのだと言う。つまり、雄狐（おんぎつね）（めすに對するおん）が小薄村の祭神として祀られていたのである。「おすすき」と「雄ぎつね」の発音が習合して（なれ合って）「おんづき」となったものであろう。



小 薄（おんづき）

◆ 七反田（しちたんだ）

◆ 筏（いかだ）

◆ 塩田（しおた）

「七反田」は、北高鍋の南端の字地。塩田川より東側で、四季亭北側の用水路の延長線から南の地域、老人福祉館までである。法務局（登記所）は字洗井（古くは洗町と書かれている）の南の端、老人福祉館別館は南高鍋で、共に七反田から外れる。塩田川を境にして西は大字上江である。その水田の面積が地名となったものである。こんな例は各地にある。新富町には五反田、六反田、一丁田という地名があるし、東京の山手線にも五反田駅がある。

「筏」は老人福祉館別館から南の地域であるが、この名の由来は不明。筏橋（古い文献に筏石橋と書かれている）から大手門までの道はやや高かったものの、塩田川から堀までの間は一面の湿地帯で外堀の役目を果たしていた。農業高校の体育館や温室はそこを埋め立てて造ったのである。以前は豪雨の際は一面湖水の如くであった。これは憶測に過ぎないが、そんな時に城内から見ると、流れに浮かぶ筏の如く見えたのではなからうか。藩政時代に筏は上級武家屋敷地帯であった。最後の明倫堂教授日高誠実（のぶさね）は、「懐旧録」（漢文）に幕末ごろのこの地域の状況と住人の事を詳しく書き残している興味深い。現在の筏橋は昭和六十一年二月十一日完成。井上春雄一家三組の夫婦が渡り初めをしている。

「塩田」は塩田川の東岸に沿う水田地帯という意で筏の南の地域である。筏と同じ高さであり、水没することはめったにない。塩田川は宮田川の支流、宮田川の河口の状況によつては、満潮の時にこのあたりまで潮位が影響するところからこの名があるのであろう。



七 反 田



筏

清観公碑文に「一日船二乗リテ將二離亭（茂広毛茶屋）二至ラントシ、漏水（井手の）ヲ見テ・・・」と書かれているから、古くは殿様の川舟が通る程の水量と川幅があったと見える。



塩 田 川

◆ 地名の考え方（その一）—— 洗井について ——

「二町民」という方からはがきを頂いた。地名に深い関心を持つていられる方らしく感謝に堪えない。登記簿に字洗井とあるから洗町又は洗と書くのは正確とは言えないという趣旨である。全くその通りで、現在の字名は登記簿に従うのが正しい。「地名の由来」の二十九回目にそう書いたつもりである。しかしことばや地名の表記については、歴史的な正しさと法規的な正しさの二面があると思う。地名の考え方にかかわることなので少し詳しく具体的に述べてみたい。次回までかかるだろうがご了承願いたい。

法規によると登記簿の表記については後で述べるが、その名の由つて来るところ、すなわち歴史的には「洗」で始まっているのではないかと私は思っている。そして始まった時期は元禄年間以前であろうと思う。

貞享三年（一六八六）に江戸の越後流の軍学の大家佐久間頼母（たのも）が二百石で高鍋藩に召し抱えられ、元禄六年から同十五年まで高鍋に住んでいた。頼母の手がけた仕事の一つが佐久間土手の築造で、高鍋城下町を小丸川の氾濫から護る様になったと伝えられている。その土手は、西小学校の東から小丸出口までの土手であるという。土手の築造以前（元禄以前）には城下町は洪水の被害を受け、きまつて水に洗われるところから「洗いまち」の呼び名が起こつたのであろう。小丸川の旧河道の痕跡がおんずきの池とは安田先生の説である。そこから塩田川へ流れたものであろう。この様なことから「洗いまち」の呼び名ができたと思えば、この語は「洗ふ」という八行四段活用の動詞である。活用の語尾は「は、ひ、ふ、へ」と変化する。しかし発音はこれを「わ、い、う、え」と発音する。従つて本来「洗ひ町」であるのを「洗い町」と発音するところから、「い」に「井」の文字をあてたと思われる。



洗 井



字の由来「洗 井」

◆ 地名の考え方（その二）—— 洗井について ——

前回は「洗ひ町」であるのを「洗い町」と発音するところから「い」に「井」の文字を当てたのだらう」というところまで書いたものであったが、名称の起こりが前記の通りとすれば、「あらひ町」を「洗ひ町」と書くのは歴史に基づく書き方である。しかし、続本藩実録・晩翠学舎日誌等の古い記録には「洗町」と書かれているから、「洗町」という書き方について述べてみたい。

現在用いられている「送り仮名の付け方」が定められる以前は、動詞の連用形に名詞が付いて連語の名詞となる場合は、連用形の語尾を書かず「洗町」の如く書くのが通常であつた。明治三十七年発行の国語辞典「中言海」には「洗粉」（あらひこ）の例が見えているが「洗町」と同じ表記法である。

しかし、法務局の「字切図」（あざきりず）には洗町を含む地域（二二七、二七九番地）の字名として「洗井」と記載されている。これは、土地の位置を示す名称を法的に規定したということであり、権利の所在場所を示す表記には「洗井」と書かねばならないのである。いわゆる法規的な正しさである。ついでに記すと、宮崎県の「字切図」（字図）は明治六年に地租改正条例が發布され、翌七年四月から土地を一筆ごとに測量し、地番を定めて土地の位置を明らかにした図面で、明治九年八月ごろ完成している。

「字切図」の字名は古来からの地名を極めて大切にしている。

「洗ひ町」又は「洗町」と書いた場合の「洗」の読み方は「あらひ」であることはよく分かるが「洗」だけを字名にすると「あらひ」（あろう）、音読すれば「セン」とも読め、三通りの読み方があつて紛らわしい。地名の呼び方を正確にする配慮から「洗井」と「い」の音を正確に示す表記が決定されたものである。ただし、語源的には「井」はワ（わ）行の井（ゐ）の音を表す文字である。「あらひ」の「い」はア（あ）行の音を表す伊、意、移、以等の文字を使用する方が理論的であつた。しかし、今は現代仮名遣いが定着している時代でワ（わ）行の「ゐ」は用いられていないから「井」に拘泥する必要はない。

◆ 蓑江（みのえ）
◆ 小島田（こしまだ）
◆ 石原（いしわら）

宮田川を隔てて円福寺の対岸一帯が蓑江で、その東に小島田が続く、県立高等職業訓練校がある。石原は蓑江の北に続き、八坂神社前の道路の延長線が蓑江との境である。

八坂神社境内の東端から南に下る通り一帯を上（うわ）蓑江と言い、それに平行する東の通り一帯を下（した）蓑江と呼んでいる。蓑江の地名の由来は詳らかでない。藩政時代には、石原と共に中級の武家屋敷があり、文化の香り高い所であった。明倫堂の設立を進言し、その創立とともに師範（後には教授）に任ぜられた千手八太郎興欽（おきかね）、同じく教授となったその子春太郎興重（おきしげ）の家は下蓑江にあった。寛政の三奇人の一人高山彦九郎は寛政四年（一七九二）に高鍋を訪れているが、旅装を改め、袴を着けて両教授を表敬訪問し、手厚いもてなしに与って感激している。高鍋藩では初めて種痘をした荒川嘯亭翁もここに住み、幕末の混乱期に処する人材養成のために、明倫堂の教育改革を成し遂げた日高誠実（のぶざね）も、「此花日記」の著者である母鳥子と共に少年期を祖父嘯亭の家で過ごしている。

蓑江の東端、中鶴井手の高樋の下は、郵便局方面から来る水と砂子田を通って来る水の溜まり場で、二本松橋から少し上の樋門あたりの低湿地帯に続き、江戸期にはまるで入江の様な趣を呈する。蓑そんな場合、小島田は小島の様である下ところから名づけられたのであろう。

「石原」は八坂神社から北、東町の裏までで、東は元祇園墓地の側までで、旧来の住宅地帯と水田や畑を埋めた新住宅地帯がある。旧来の住宅地帯は旧高鍋城下町に近い。砂利の多いところから石原の地名がついたのであろう。



石原

日向地誌によると明治十三年頃には戸数は一五戸であった。旧高鍋城下町は藩政時代約二六〇年間に三〇戸以上の焼失の大火が三回あったが、石原まで類焼したことが五回ある。天保九年には医師川崎養宅の家まで焼けたと記録されている。

平成三年二月発行・高鍋町議会だより

No.四四

◆ 水谷原（みずやばる）
◆ 水谷坂平付（みずやざかひらずけ）

前回に引き続き南高鍋について書き続けることにする。

宮崎県ばかりではなく、地名として用いる「原」は、西ヶ原・石原のように「はら・わら」と発音するよりも、馬場原・牛牧原のように「はら・ばる」と発音することの方が多くようである。高鍋では人名についても同様である。

水谷原は水谷坂を上がった標高六〇〇七〇メートルの洪積台地の北端で高鍋町を一望に収めることができ、二六戸の集落がある。



水谷原



水谷坂平付 (円福寺東)

水谷坂平付は、その台地の北斜面を言い、森林地帯であり、欄干橋から円福寺入口に至る線を延長した所から神祭野坂（こぜのざか）までである。「ひらず（づ）け」とは、ある物を外の物にびつたりと着けることで、じかづけの意味である。神祭野坂以東の台地斜面は茂広毛平付という字名となつてゐる。これらの斜面の森林地帯には湧き水が絶えず流れ出て、いくつもの谷を形作っている。水の湧き出る谷の坂路を音読すると「みずやざか」であり、坂を登りつめた台地が水谷原である。元禄二年八月二十七日に水谷古坂の通行を禁止し虎落（もがり）を組んだということが、拾遺本藩実録卷之一に見える。お城を見下ろすからである。それ以来明治初年まで、水谷坂は二〇〇メートル位東の谷に変更された。宮田川沿いの旧国道に、県庁から七里という距離元標が建てられている。そのあたりが変更後の坂の登り口という。旧国道ができる以前は、水谷坂から、上水谷への道と上日置への道と二筋の道が三納代・富田（新富町）に通じていた。

水谷坂平付には永徳山円福寺がある。浄土宗総本山智恩院の末寺で応永年間（一三九四～一四二七）に土持氏によって建てられ、開山は久意上人である。裏山に明治三十一年勸請の八十八箇所霊場がある。警保局長や大分・群馬・滋賀各県知事となつた鈴木定直は水谷原出身で、新水谷坂の登り詰めた孟宗林の南の長方形の畑がその屋敷跡という。

平成三年九月発行・高鍋町議会だより

No. 四六

◆ 大工小路（でつくじ）

大工小路は字名ではなく、字、「恵良」の中の小地域の名称（小名）である。航空自衛隊へ行く道筋の、蓑崎のシグナルから南へ約百メートルの所から東へ入る袋小路を大工小路と言い、戸数十二戸がある。恵良・内宮田・光音寺の三つの字地を含む自治公民館活動の地域の名称である。小名がより広い地域の公民館の名称として用いられているのは、「でつくじ」という呼び方が藩政時代からのものであり、高鍋独得の訛つた発音で親しみがあるところからと思う。藩政時代には読んで字の如くお抱え大工の住む小路であつた。文化年間（一八〇四～一七）の記録には、金沢平七、河野源吉、日高九市、宮本健郎という大工殿（でくどん）の名が見える。光音寺にも日高金右衛門、日高仙右衛門という大工殿の名が見える。公民館長の黒木武氏家の祖父の代までは大工であつたという。

現在は太平寺を通過する高岡線、毛作を通過する佐土原線の両県道が整備され、耕地整理も行われ昔とは随分違つた状況となつてゐる。元は太平寺へ行く道は二筋あつた。一つは蓑崎から太平寺井手に沿うて山の裾を大回りする道筋もう一つは大工小路の入口から西へ通ずる道で「奥ノ下橋」の下手で宮田川を飛び石で渡り、更に鐘塚橋の少し上流で再び飛び石で渡り、川越氏と野村氏の入口から太平寺井手に沿うて川上神社に至る道筋である。大工小路入口から最初の飛び石までは道幅が広く桜並木があり、乗馬練習のための馬場でもあつた。その名が「奥ノ下橋」を越えた西に「馬場田」の字名で残っている。明治十四年ごろ大工小路公民館の東側に「桜埦小学」（さくらば）という小規模の学校があつたが、その名もこれに基づいている。馬場に埦（らち）の字を当てているのは、馬場の柵を意味するからである。大工小路公民館の西表は道路で、蓑崎から光音寺に至る旧道であるミキ美容室の裏から光音寺の野津手氏宅の東側に通じ毛作に至る。字名の「恵良」は何を意味するのか明らかでない。



大工小路地区

◆ 蓑崎 (みのさき)

蓑崎は字名ではないが、大工小路を述べたついでに記して置きたい。高鍋城跡の台地が南東に突き出している先端が蓑崎である。崎とは「出つ張つている所、突き出た所」という意味である。舞鶴公園の前の道が拡げられた時、突き出た所は大分削り取られて道となり、その南の十字路に蓑崎のシグナルが設置された。西北の角に松尾商店がある。松尾商店に覆いかぶさる様な台地の先端が蓑崎である。本藩実録には「見野崎」と書いてある。そこからは城の南から東へかけての平地(野)が見渡せるところから「野の見える台地の崎(先端)」と言ったのだが、その意味が分からなくなって蓑の字を当てて書く様になったのであろう。

この台地には高鍋藩の祈所であった地福寺(ちふくじ)と天神宮が建てられていた。地福寺は三宝院系の修験宗の寺院で源忠法印の開基である。高鍋藩の最大の寺院で寺領百五十石であった。住職の増坊(住家)もあり円実院と言ったところから、そこに住む住職も円実院と言っていた様である。廃仏毀釈のため明治三年に廃寺となった。その名残として古井戸が残っている。その南東に天神宮が祭られていた。初代藩主種長公が移封の際に祭られたとも言い、正保三年(一六四六)旧領大宰府の天満宮を勧請し左翼の八幡宮に対峙させて祭ったのだともいう。そこには巨大な老松があり、昭和二十年ごろまでその勇姿を見せ、人々は天神松と呼んでいた。現在天満宮は舞鶴神社に合祀されている。

台地の先端の下には城のお堀があり、蓑崎橋が架かり城内側に蓑崎門という二層造りの櫓門(やぐらもん)があった。島田門より両端が一間(一九一センチメートル)ほど大きく、元文二年(一七三七)の修復の際、島田門程度にしてはと評議されたが、結局は元の通

りには修復されたという記録がある。蓑崎門は番卒が四六時中守り、本門は鍵を下ろし御用の時だけ開け、藩主在国中だけぐりを開けることとし、明け六つに開け、暮れ六つに錠を下ろしたという記録がある。



蓑崎台地から東に平地が見渡せる

◆ 奥の下 (おくのした)

◆ 野首 (のくび)

◆ 浦芳太郎下 (うらよしとろうした)

旧城内の護国神社の神域は藩主の私生活の場所と奥御殿があった。その南下の地域を「奥の下」と言う。舞鶴団地のある地域である。城山の麓まわりに勘右衛門水路が流れ、それに沿う集落を「脇(わき)」と呼んでいる。城山の脇の意で、城の南麓を守る重要な所であった。

農業高校の明倫寮のあたりを「野首」(のくび)と言う。野首とは、台地が細くなっている、人の首に相当する軍事上の要害の地を言う。高鍋城は元、野首と峰続きであったが、慶長十二年(一六〇七)城の後を掘り切って城山を孤立させ、掘り切りに野首番を置き、搦手を警備させた。野首番の一人が浦芳太郎であった。

「浦芳太郎下」はその名を付けた地名である。「奥の下」の西、「鐘塚」の東に当たる。地名を姓とすることはよくあるが、個人の姓名を地名とすることは珍しい。

芳太郎は蓑崎の浦司氏の祖父である。川南田神の生まれで旧姓は大山氏。浦藤二郎の娘千加の婿となつて浦家を継ぎ、野首番と共に野首の山留(やまとめ)でもあった。山留とは藩有の山林の管理者である。続々本藩実録巻四、安政六年(一八五九)二月廿六日の条にその名が記されている。明治四年の廃藩置県後、野首番は廃止され、芳太郎一家は野首の台地にある畑に移り住んだ。高鍋の「字切図」は明治九年に出来た事は前にも書いたが、浦芳太郎



城山南北から脇地区を望む

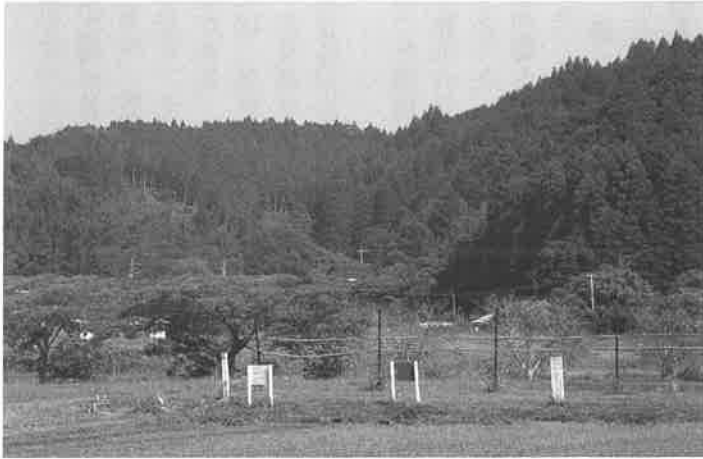
は前にも書いたが、浦芳太郎の住居の南下にある南高鍋七三七八番地から七三八番地に至る地域を「浦芳太郎下」という字名にした調査官は、随分面白い弾力性のある人物と思われるが、芳太郎も立派な人物であったのであろう。司氏の話によると、芳太郎は体格も氣つ風（きつぷ）もよい人で、「やん直しや一時（いつとき）、見るは一代」とよく言っていたという。「失敗しても遣り直し一時の恥、一時の辛抱、見るだけで実行しなければ一代そのままで発展は無い」という意味であろうか。芳太郎の男の独り子は早世したため、古屋作太郎の弟重義を養子とし、芳太郎は明治三十四年二月二十一日に没した。

平成四年五月発行・高鍋町議会だより

No. 四九

◆ 重間（しげはざま）

重間は前回述べた浦芳太郎下の西北に当たる谷間で、元の町の火葬場や農業高校の豚舎の西下の斜面から谷間一帯を言う。農業高校の果樹農場の南下でもある。本藩実録巻五に、三代藩主種信公の六女お国姫が病氣のため、江戸から高鍋に帰って保養したいということで、元禄十五年（一七〇二）八月シゲハザマ（繁峡間）に新宅を造って貰って住まれ、久米田左助の外兩人が世話をした。享保十四年（二七一九）九月亡くなられると、法名を涼泉院殿と称してそこに葬り、後に安養寺（役場西）に改葬された。住居跡は涼泉庵と名付けたと記されている。その庵（いおり）後が元火葬場となったのである。二十七年間療養とはどんな病氣であったか知る由も無いが、



脇地区から見た重間

お気の毒な方であった。「繁峡間」（しげはざま）と書いてあるので、樹木の繁った狭い谷間という意味である。平部 南著の日向地誌には、ここには重狭間池があり縦二十間、横十五間、深さ七尺、面積二反と記されている。

南が調査に来たのは、西南戦争の翌年明治十一年六月十二、三日である。この谷は樹木が繁っているので水量が多い。現在行ってみると、養鰻場になっていたらしく、水の無いコンクリート壁の池跡が谷の上流から三つばかりあり四番目に水を湛えた二反ばかりの池がある。南が記した池と思われるが深さはさほどではない。太平寺から山麓を大回りしている勘右衛門水路は池よりずっと下だからそれより高いところの水田に灌漑していたとみえる。

この谷の上流が上江松本坂の中腹にも今もある掘貫き井手の水源となっている。この掘貫き井手は九代種任（たねただ）公の治世の文政六年（二八二三）正月に完成している。掘貫き井手の水が松本坂の四軒の水車を回し、平原あたりの精米所となり、水は松本の水田を養っていた。

重間より西の谷を西重間と言う。この谷川は南牛牧からの谷川で、現在はコンクリートの堅固な砂防ダムが造られて水流を調整している。

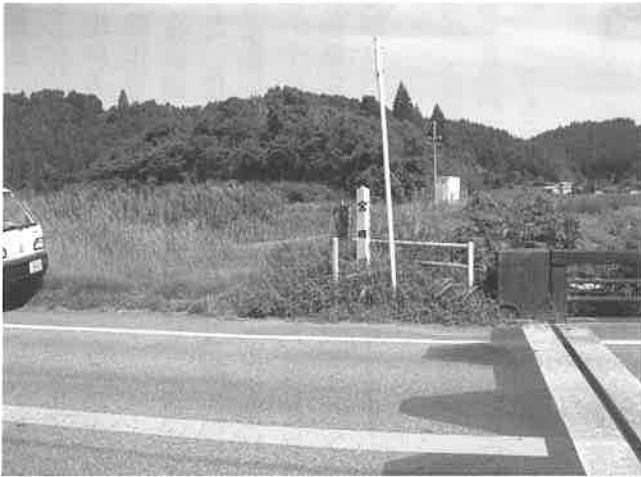
◆鐘塚（かねづか） ◆太平寺（てへじ）（再）

前回書いた重間の南の低地が、字、鐘塚である。西は字、太平寺に接する。西都市に通ずる県道に架かる鐘塚橋の西北に、鐘塚という古墳型の丘陵がある。鐘塚と言うが古墳ではなく、標高廿八・五メートルの丘陵で、そのまわりに南高鍋七二四番地から七八二九番地まで百五筆の水田がある。広い水田地帯にボツンとある丘陵は、その西の高台に、曹洞宗の古刹養国山太平寺が聳（そび）えていたところから、梵鐘を連想して丘陵の名としたものであろう。鐘塚には太平寺の鐘楼があつたそうだという話がある。しかし、いろいろな点から考えて、鐘塚という名称から連想して作り出した話であらうと思われる。今、それを考証するいとまはないが、土持氏の墓の近くにあつた太平寺からは、あまりに遠く離れ過ぎていて不自然である。

太平寺については、「議会だより」第十九号の「地名の由来」第九回に書いたのであるが、少し付け加えて置きたい事がある。

それは比木神社がお里まわりに太平寺の川上神社に御神幸なさる事についてである。比木神社のお里廻りは十月廿七日から始まり、第二日目に神輿は宮田神社を御発幸になり、太平寺の川上神社参拝後、大字持田に行かれるが、川上神社参拝の始まつたのは大正十年代である事を記して置きたい。

それまでは太平寺入口の野村家へ御神幸になっていた。大神はその昔、野村家で雑炊の饗応にあずかったというので、雑炊をお供えするのが恒例となっていた。御神輿は、野村家の入口の太平寺井手を渡った所に方形



県道「かねづかばし」から見た鐘塚

にしつらえられた土の壇に安置された。この土の壇はその周辺と共に普段から手入れされ、子供らも上がることは許されない神聖な場所であつた。雑炊を饗応された大神は福智王であつたのであろう。幾百年來の仕来りで、御神幸のあることが野村家の誇りであつた。しかし、大正年間になつて野村家の主人二代、あまり年を措かず亡くなったところから大神の饗応を鎮守の川上神社にお願いする事になったのである。川上神社の祭神は興止比売神（よとひめのかみ）である。

平成四年十一月発行・高鍋町議会だより

No.五一

◆蚕丁場（かいこちようば）

高鍋を中心とする地域は、明治、大正から昭和の初めまで、養蚕が盛んで生糸の生産地として知られていた。現在の高鍋町役場と税務署の敷地には、高鍋製糸株式会社（高鍋製糸）の生糸は、明治四十四年にイタリアで開かれた万国博覧会で金賞を受賞し、高鍋の製糸業のレベルが、いかに高かったかを示している。大正二年夏には、県下全体の製糸業者の集会や農商務省主催の沈み繰り製糸講習会が高鍋製糸株式会社で開かれていた。



空から見た蚕丁場（石村照光氏提供）

高鍋地域の養蚕と製糸業を始めた人は、旧藩の家老秋月種節（たねよ）である。明治の初め、武士達は禄を離れ、それぞれ自活の道を立てねばならなくなった。種節は会計局知事・物産方総裁となり、摂津（兵庫県）近江（滋賀県）から男女数名の指導者を招き、桑園を作り、養蚕室を建て、城内物産方の倉庫に工場を設け、製糸の実技指導を行い、土族の自立を図った。桑園と蚕室の跡が、現在蚕丁場という字名として名残を留めている。桑園は太平寺墓地の側の坂道を上がり詰めた所の右側である。現在そこには石村照

光氏経営の梨園と販売店がある。梨園と、その東と北の約五、六町歩が桑園の跡だという。蚕室はそこにあつたと思われる。丁場とは事業現場を指す語で、語源は帳場か。上江谷坂に銃砲製作場があり、谷坂丁場と称した記録がある。経営業務の行われる場所、あるいは勘定場の意であろうか。

秋月種節の祖は秋月家の支流で、筑前国の水筑地方を領有し、水筑姓を名乗っていたが、維新後秋月姓に復した。種節は小一郎とも言い希陶と号した。高鍋の四哲すなはち水筑弦太郎・黒水長年・秋月左都夫・鈴木馬左也の父である。製糸事業が漸く発展しようとしている時、明治十年の兵乱に遭い頓挫してしまった。種節は、西郷方の日向参軍坂田諸潔のため、後に九烈士と大義を讀えられる人々と共に牢中に監禁され、終に牢死するに至り、多くの人々を酷く悲しませた。

高鍋で養蚕及び製糸業に貢献した人々は種節の外に、種樹公を初め、平林忠恕・黒水長平・石井万吉・岩村真鉄（まがね）等があり、女性では則松クラ・荒川リクがいる。忘れてはならない人々である。

平成五年二月発行・高鍋町議会だより

No.五二

◆ 市の山（いちのやま）

◆ 牧内（まきうち）

「市の山」の語源は「一の山」で、「一の宮」「一の人」の一同じく「第一」の意であろう。一の宮（都農神社）は日向国第一位の神社の意、一の人 は太政大臣の事で、天下第一の人の意であり、「一の山」は、この地域の第一の深山の意であろう。市の山の菅原神社の境内は海拔七三・四メートルで、高鍋城の頂上より二〇センチ低いだけであり、牧神様の祭つてあつた山は海拔一二六メートルで、高鍋で最も高いところであつた。

「牧内」は字の如く、「牧場内」の意である。ここに高鍋藩直営の馬牧場が設けられていたのは、種政公治世の宝暦九年（一七五九）で、今から二三四年前のことである。防災ダムより上流の宮田川（小並川）を境としてその西を放牧場としたのであろう。牧内（大字上江）牧ノ内（木城町大字椎木）という字名があるから、牧場の区域の大凡の見当はつく。相当広い地域である。牧場としてどんな設備がなされたか明らかではないが、宝暦十年二月二十日、牧場の設備が成就したので、家老の手塚勘五左衛門と小田藤兵衛が係役人と共に点検の上、祝杯を挙げ、翌年には雌馬二三頭すべて子馬を生んだので牧

神様に祝杯を供えたことが記録に見える。坂本サチ子さんと立山節子さんに承ると、昭和三十二年ごろまで、旧暦二月十九日に牧神様に甘酒を供え、参拝した人々に甘酒を振舞うという行事があつたことである。これは牧神様に祝杯を供えた事がこの様な行事として伝えられたのではあるまいか。二月二十日と十九日と、わずか一日のずれであるのも注目すべき点である。そんな市の山牧場も寛政元年（一七八九）廃止された。廃止の理由は、冬の飼料が乏しく、子馬の出生率も低下し、猪や鹿が住みつき、農作物の被害が多かつたためで、馬はすべて都農の岩山牧場に移し、牧神山・小並・新山以外は牧場で働いていた人々に無料で支給し開墾させたと記録されている。牧神様は松丸又信氏の家のすぐ北側の雑木山の頂上に祭られていたが、昭和三十二、三年ごろ、菅原神社に合祀され、今は祠堂の土台の石垣圍だけが残っている。



牧内馬牧場跡地

◆ 高平（たかひら） ◆ 江平（えひら）

いずれも地形からの名称で、市の山の東、高鍋防災ダムの東から東北にかけての字名で、太平寺地域の西に当たる。昔の人は訛って「たかへら」とも言ったが、正しくは文文字通り「たかひら」である。

太平寺橋の少し西から右に入ると高平橋がある。そこから西を振り仰ぐと、杉山のあるあたりが防災ダムの堤防である。橋から二、三百メートルの所に二階建ての坂本進氏宅があり、更に少し登ると、清水養魚場という石柱があり、コンクリート壁や番小屋が残っているが、養魚は行なわれていない。

此処は高鍋の著名な企業家黒木清五郎氏が、明治四十五年頃、豊富な水量を利用した水車による骨粉製造工場を設けた場所であり、坂本進氏はその責任技術者であった。ここから遠くない中尾橋下の立光房吉氏の工場と共に、当地方の農家に酸肥料を供給する重要な工場であった。昭和十六年原料不足から廃止し、終戦後養鰻業に切り換えたが、諸種の経済事情からこれも廃止のやむなきに至り、昭和三十七年、高鍋地域の雨期の防災のため、五億三千万円、当時としては巨額の予算を投じてダムが建設された。堤長一七九メートル、堤高は標高五四・三メートル、貯水量九万六千立方メートル、しかし、渇水期には貯水しない。堤防の北端に近い公民館附近は標高五七・二メートルで、一帯が平坦であるから高平という地名は極めて適切である。



防災ダムより高平江平台地を望む

江平の地名の由来は明らかでないが、江平の江は、例えば入江の江の如く海水が陸地に入り込んでいる所をいう様に、谷間が複雑に高い平坦地に食い込んでいる地勢を言うのであろうか。江平は高平の北に位置し、唐木戸霊園の西の窪地の水を宮田川

に流す複雑な谷間に沿う高台である。

大正の頃、公民館のあるあたりに、内田某という敬虔な御大師様（おでつき）信者があり、この地域の人々（現在は七戸）はその感化で、二〇センチ程の銅の子安大師の仏像を買ってこれを祭り、三月二十日に輪番で祭宿を定め、煮染、煮豆、酢の物、ちらし寿司を持ち寄り、仏像を並べて供養の後、酒盛りをして懇親の機会とした。内田氏は今は亡いが、現在は公民館で供養の行事は続いているという。こんな心温まる話をしてくれたのは坂本進氏宅の若い主婦である。

平成五年八月発行・高鍋町議会だより

No.五四

◆ 南唐木戸（みなみからぎど） ◆ 北唐木戸（きたからぎど） ◆ 福井牟田（ふくいむた） ◆ 中尾（なかお）

黒谷坂を上がり、中尾橋・茶臼原を経て杉安に至る県道、正式名称は杉安・高鍋線、又は三一三号線に沿っている字名である。南唐木戸は県道の南で、やまばと保育園や唐木戸霊園のある所である。北唐木戸は県道の北側沿いで中尾橋の架かる小並川までである。

唐木戸の木戸は、広辞苑にある通り、柵戸・城戸とも書き門の意である。昔は中尾橋を渡ったところから市乃山牧場で、牧場の木戸がこの辺にあつたのであろう。

高鍋藩史話にはカラケド（韓街道）は韓国人を置いていた郷名のある一証であると述べているが、あるいは韓国人のいた木戸があつたのかもしれない。

やまばと保育園から西へ六〇〇メートル程行くと、道の南側の丘の下に、五〇平方メートル程の小さな池がある。睡蓮がいっぱい浮かんでいる。池の持主は甲斐信雄氏で池の側に住んでおられる。この辺は福井牟田という字である。牟田は湿地ということだが、今は水田は無い。昔は湿地があつたのであろう。此処は湧き水の多い所で、甲斐氏の池は清冽（せいれつ）な水が年々湧き出している。「福井牟田」とは「幸福を与えてくれる井手のある湿地」



唐木戸霊園から山ばと保育園を望む

という意味ではなからうか。この池には鯉や緋鯉が泳ぎ、夏の夜は螢が飛び交い、各種のトンボが育ち、睡蓮が咲く。春から夏にかけて、この辺の電線には数百のツバメがとまっている。この池の水を飲み、水浴びをし、電線にとまって疲れを休め、元氣を取り戻すと飛び立って行くのである。

中尾橋から百五〇メートル川下に、石垣の残っている所がある。明治の終わりが、立光房吉氏の水車による骨粉製造工場の跡だという。中尾公民館長本多光幸氏の話しによると、そこには、終戦近いころ、この地域を警備していた通称ゴロ部隊の本部が置かれていた所だという。

中尾橋の西から南にかけての地域が中尾である。中尾橋を渡ると県道の南上に丘があり、丘の上に「市之山小学校跡」という記念碑が建っている。ここに明治二十年から市之山尋常小学校があり、同三十七年から上江小学校の分校場となり、昭和二十八年に「やまばと保育園」のある場所に移転し、同四十一年に廃校となった。

「中尾」の「尾」には、「山の小高い所・丘」の意味があり、市之山小学校の在った丘が此の辺の中心地でもあったところから、「中尾」と言ったものであろう。地形名称の一種である。

平成五年十一月発行・高鍋町議会だより

No.五五

◆ 東小並 (ひがしこなみ)

◆ 西小並 (にしこなみ)

◆ 黒土田 (くろつた)

宮田川の水源は西都市茶臼原近くの宮の前(みやんまえ)で原牟田(はんのむた)土橋(つちはし)を経て、小並橋を流れるあたりから下流を小並川と言う。小並橋は、西都児湯塵焼場に入る道路を南へ五〇メートル行った所に架かっている。道の西側は木城町管内で、塵焼場の西は小並原、東は高鍋町東小並である。小並橋を南に渡ると、道の西側は木城町仏山(ほとけやま)、その西南が木城町牧の内である。小並川沿いの西側、



中尾橋近くまでが西小並で、県道の南側は黒土田である。黒土の水田の印象が強いことからの地名であらう。

明治四一年四月、俵橋(県立農大)に軍馬補充部が開設され、広大な地域が馬の放牧場となり、茶臼原及びその周辺も小並地域も放牧場であった。牧場の境には、馬の逸脱防止のため、堤防状の土手が築かれていたが、小並川兩岸は崖状に切り立っていたから、転落防止のためか、川岸からかなり離れた所に土手が築かれ、現在も残っているところがある。又、馬の水飲み場の跡も残っている。

小並という地名の由来は明らかでないが、小は木(こ)の当て字で、巨木の並び立っていた所からの名称かもしれない。五三七年前の長禄元年(二四五七)に都於郡城主伊東氏が、椎木坂近くの民家の焼き払いを手始めに、財部(高鍋)の土持氏を毛作原に打ち破り、土持金綱(兼綱)を討ち取った戦いを小浪川の合戦と言ったと日向記に記(しる)されている。文字は違いますが小浪川は小並川であることは明らかである。毛作原の合戦を小浪川(小並川)の合戦と言っていることから考えると、宮田川という言い方はまだ無かったのであろう。

西小並、堺谷、大谷を左谷(ひだつだに)小並川の方の谷を右谷という古い言い方があった由である。谷の流れの上流に向かつての言い方であらう。

小並地域は終戦後、多くの入植者によって開墾された所である。押川起道公民館長の話に依ると、現在三一戸の農家の内、古くから住み着いていた人は三戸、最初の入植者で今も残っている者が七戸、その他の二一戸は、開墾地を譲り受けた後からの入植者である。土地を手離した人々は、開墾の苦難に耐えられなかったか、後継者のない人々であつたらしい。現在の人々は生活も安定し、公民館活動の婦人部は「こなみだより」という手造りの機関誌を発行し、来る正月には一〇〇号を発行すると聞く。健闘を祈りたい。

◆牛 牧(うしまき)

(牛牧原・北牛牧・南牛牧・

上耳切(かみみみきれ)・下耳切・老瀬坂上)

高鍋町の西の台地を総称して、牛牧と言っている。昔の人は「うわの(上野)」「上ん原(はる)」とも言った。台地の上であるが、起伏のなだらかな野原の意で、適切な言い方である。牛牧入口の黒木酒店あたりが海拔八〇メートル内外、最も高いところは字老瀬坂上の二つの貯水池の北部で一二メートルである。この地域の中心部は字、牛牧原で、それに隣接する地域が牛牧と総称されている。しかし、行政区画としては牛牧と南牛牧に区分し、牛牧は小字の北牛牧・上耳切・下耳切・老瀬坂上・江平と高平と大戸ノ口のそれぞれの一部と永田を含む地域で一二六戸。南牛牧は、字南牛牧・蚕丁場・太平寺の一部を含む地域で四五戸。しかも古来の牛牧の中心部である牛牧原(ばる)は中尾地区に所属している。

このあたりには、前方後円墳七基、円墳一三基、合計二〇基の古墳があり、古墳時代には、豪族に率いられた幾つかの集落があったことを示している。

牛牧という地名は随分古い地名と思われる。平安時代中期の延長五年(九二七)成立の延喜式(えんぎしき)(日本の基本法典)の丘部省の部に、官営の牧場の置かれた十八ヶ国が挙げられ、その中に日向国の馬牧と牛牧が三ヶ所ずつ記されている。馬については、日本書紀に「馬ならば日向の駒」と歌われている程著名であり、現在も都井の岬馬として広く知られているが、牛の生育地としても有名であった。

牛は農耕・運搬の外、乳用・皮革用に用いられた。高鍋には縁が無いが、平安時代の貴族は乗物には牛車(ぎつしや)を用い、馬車は用いなかった。牛乳は薬用とする外、蘇(そ)と言う乳製品を作った。延喜式には、蘇の貢進に四六ヶ国と大宰府を指定している。以上の事から見ると牛牧という地名は平安時代につけられた地名ではないかと思う。

「うわの(上野)」又は「上ん原(はる)」と言われる地域の集落には、神社・石像・祠堂等の宗教的建造物が少ない。この事はこの地域の民俗を考える上の特徴的な点というべきであろう。この地域特に南牛牧の開拓は終戦後であり、その経緯は公民館敷地内に建てられた「開拓の碑」に、建設委員長野間健一氏外委員九名組合員三一人の氏名と共に刻まれている。

牛牧地域はそれより少し早く、公民館敷地に、上江郷社愛宕神社の分霊が大正元年十一月勧請され、記念碑に加藤時磨氏外二〇名の氏名が刻まれ、開拓者でもあった事を示している。祠堂としては、老瀬坂上東端に須杵原神社のあることを誌して置く。祭神は不明である。



◆老 瀬(おいせ)(再)

◆烏帽子形(えぼしがた)

◆加志揚(かしあげ)

老瀬・木ノ瀬についてはずっと以前に、小丸川の古い流路が地名に残っているのであると書いたが、少し付け加えて置きたい事があるので再び取り上げた。

大字上江、宿之坂下の浄水場前を経由して木城町出店に行くバス通路の南側の最初の集落が老瀬で、通路の北側が木ノ瀬である。行政区としては、木ノ瀬・加志揚も含めて老瀬と総称し、戸数六〇、公民館長は江藤栄夫氏。字地としては烏帽子形・田畑も含むが、田畑の集落は木城町に属し、人家の無い三九筆の水田・畑が老瀬区内である。

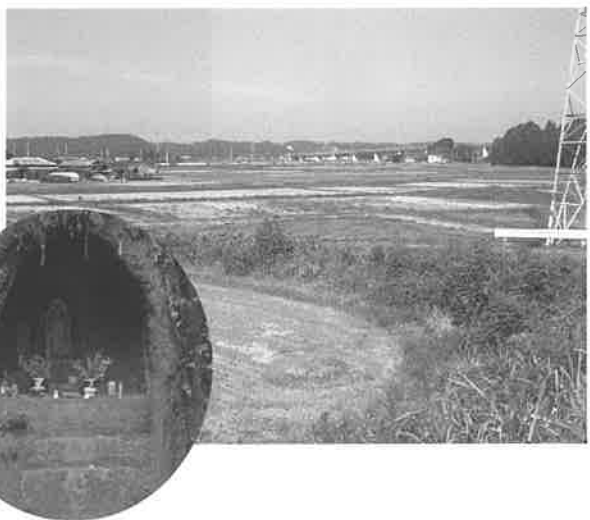
バス通路に北面して公民館があり、入口は木ノ瀬停留所である。老瀬公民館の老の字は木へんに老と書いてある。老瀬・木ノ瀬公民館だからとは館長の説明である。漢字は便利なものである。

公民館の前庭には立派な祠堂が建てられている。老瀬の菅原神社と木ノ瀬の若宮神社が合祀されている。菅原神社は老瀬の人々が、若宮神社は木ノ瀬の人々が、七月と十一月に、それぞれの例祭の日に祭るといふ。

烏帽子形・加志揚とも名の由来は不明である。烏帽子形は、字図で見ると、地域の形が似ているところから名づけたものではないかとも思う。老瀬坂の通っている洪積台地の傾斜面である。加志揚は、烏帽子形の西に接続し、同名の溜池を含む地域で、田畑から老瀬坂に至る道の西側である。その南の奥の山中に、この地域では有名な老瀬観音が祭られている。雄滝・雌滝という二つの小さな滝の中間の岩間に祭られている石仏観音像で参拝者が多いといふ。安産と五穀豊稔の祈願をするといふ。仏像には文政十年(一八二七年)の銘記がある由。八月二十五日の祭礼には、滝の清水を利用した「そうめん流し」のもてなしがあつて評判が高かつたが、崖の故障で現在は中断しているといふ。昔は滝からの流れを利用する水車屋が四軒あり、地域の精米を行ひ、元禄の頃(三〇〇年前)には加志揚の溜池が作られ、一〇ヘクタールの水田を養っていた。

老瀬観音前の鈴加美人氏の東庭には梅の太木があり、平成五年二月、高鍋町の銘木、第三五号に指定されている。

木城町管内になるが、田畑停留所の所に、広谷用水路を開設した山口弘康翁の胸像が建てられている。胸像の作者は南部祥雲氏、木城町長鶴田国利・高鍋町長渋谷清明両氏が委員長・副委員長となり、昭和五十四年五月の建立である。



◆山 王(さんのう)

◆上ノ園(うえんその)

◆羽根田(はねだ)

川田の西端、能勢正盛氏宅の前から西へ行く道を数百メートル進むと、長法寺溜池の堤下に出る。道は池に沿うて北から西へカーブし、小祠の前から山王公民館前に出る。(木城・高鍋バス道路の通じる以前は、この道が木城道路であつた。)小祠は間孝氏の屋敷内で、その西隣が平田文彦氏宅である。小祠附近が長宝寺入口で、平田家あたりが庫裏(くり)であろうと故大泉篤範氏は推定していた。小祠は八〇糎ほどで、数体の仏像らしい物がある。この小祠が山王神社で、この地域の字名ともなっている。間孝氏は昭和の初めごろは、雨天には子供達の遊び場となり、十畳敷位の広さで萱葺きであつたと言われる。

山王とは、比叡山の東麓大津市坂本の日吉(ひえ)神社の別称で、最澄が

大和国（奈良県）の大三輪神すなわち大物主神の勧請（かんじょう）し、比叡山の守護神としたのにはじまると言われている。

貞享三年の高鍋藩寺社帳によると、長宝寺の寺内神であったと思われる。この溜池は長法寺溜池と書かれるが、長宝寺と書くのが正しい。正徳年間（一七一―一七二）には廃寺となったと思われるので書き誤ったのであろう。長宝寺は慶長三年（一五九八）舜覚法印が中興開山し、山号は日陽山、本尊は薬師如来であった。拾遺本藩美録巻五、正徳元年一月三〇日の条に、間与作に長法寺境内中に屋敷一反を与えた事が記されている。与作は間孝氏の祖父と思われる。

長法寺溜池は元禄七年（一六九四）に河内山清八が奉行として人足五千人をかけて作った。清八は秋月左都夫氏の祖先である。

長法寺池尻の東南部は字上ノ園である。水田地帯の川田・楠木・馬場原の人々は畑作をここで営み、台地の上の畑の意味で上ノ園と言ったという。（酒井氏談）

羽根田は寺院の多い所であった。羽根田も寺院の名称であったと思われる。平部 南の日向地誌の上江村の古迹に次の通り記す。

羽根寺址、宗派審ナラズ。羽根田二アリ。廃毀ノ年月考フベカラズ。今宅地トルナ。

故大泉篤範氏は寺名が小集落名となつてゐるものに羽根田を挙げているから、羽根田という寺院があったという説である。しかしその根拠は示されていない。



平成七年二月発行・高鍋町議会だより

No. 六十

◆ 宮越（みやごえ）

前回まで大字上江の小字について書いたので、飛び入りの様であるが、永年疑問であった宮越の由来の見当がついたので、その事を記して置きたいと思う。

宮越の立花神社の摂社（境内に祭られた神社）に若宮大明神がある。古老の口碑（口伝え）によると、数百年前に宮越地域に悪疫が流行し、多くの人が死亡したので、若宮大明神様（わかみやでめじんさ）に越して来てもらったら、悪疫が治まったという。若宮大明神様は下宮越の一隅に祭られたが、明治四十一年四月廿五日に、伊勢神社・



木城線から下宮越を望む

菅原神社と共に立花神社に合祀（ごうし）された（宮崎県の児湯郡神社明細帳）。若宮神社の祭神は倉稲魂命（うかのみたまのみこと）で、食物、稲の神、穀物の神と言われている。

どこから越して来たのか明らかでないが、立花神社宮司永友宗範氏所蔵の古文書に、古老の口碑に『本神社に大隈国棟木（おおすみのくにむなぎ）等云々』と書かれているところからみると、大隈国（鹿児島県東部大隈半島）から越して来たのかもしれない。

何時ごろの事かという数百年も前の事らしい。宮越出身で文部省の事務官になった郡軍二という人がいた。その人から「供養松の記」という著書を頂いたことがある。「郡家五代小史」と副題が付いている。郡家の歴史を書いた小冊子で、昭和五十二年三月にかかれた書物である。その中に、祖母八重さんから聞いた話として疫病流行の事が記されているが数百年前の出来事らしい。

宮越にあった供養松は、疫病で亡くなられた宮越村の人々の霊と、同じこ

ろに枯れた「大楠が池（うぐすがいけ）」の大楠の霊を供養するために植えた松であると言う。大楠が池は、町の野球場の入口あたりから、県の総合庁舎あたりまであった大きな河跡湖だが、岸辺に大楠があったのでその名が残ったのだろう。

宮越の供養松は根まわり1メートルを越し、高さは二十メートル位あったというから数百年経過した大木で、大正三年ごろの台風で倒れたという。それらを勘案すると、若宮神社が越して来たのは数百年前ということになり、宮越の語源は「宮越し」であろう。「宮越し」が語音の変化で「みやごえ」と言われる様になったと思われる。「大楠」を「ウグス」と言うのも高鍋方言の特色である。「大」を「ウ」と発音する例は「大事」をウゴツと言っている。郡家初代の一郎右衛門は月山一刀流の達人で下宮越に道場を建てていた。

平成七年五月発行・高鍋町議会だより

No.六二

◆◆ 上宮越Ⅱ立花神社参道 挽木出口（ひきでぐち）

（付）ひゅうたん

前回宮越について記したので、序でにその附近の地名について述べておきたい。昭和五十年十一月一日に完成した「しんきん通り」の北の終点は、木城町へ通ずる道を越えて立花神社参道に続く。立花神社参道は正しくは上宮越である。現在は「しんきん通り」を中にして縦横に道が走り、高鍋町のメイン・ストリートになろうとしている。この道の出来る以前は、排水の悪い湿田地域であった。そのころには、宮越の「だんごの丸一」の南裏、宮越児童公園の北側から、後小路が宮交営業所の方へ曲がる曲がり角まで細い道があった。その道は、永友宗範氏・内田病院・



宮越児童公園から南西を望む風景

まるき屋・聖母幼稚園の東側を流れているかんがい用水路に沿って南へ走り、「若寿司」の所が十字路となり、南は大正通りに接続している。その路と田ノ上墓地との間の水田地域が挽木出口という小字で、厳格な言い方をすれば、北高鍋一〇二〇番地から一一二八番地至る一〇八筆の水田のあった地域が挽木出口である。端的に言えば、宮越・小丸と田ノ上墓地との間が挽木出口である。挽木（ひきぎ）とは、粃を玄米にする臼、正確には礪臼（ひきうす）を引き回すためのひじ（肘）の形の柄を言うのである。「しんきん通り」がまだ無かったころ、上宮越通り（立花神社参道）はまっすぐ南へ出る道がなく、藤井青果店の東の小路を通って南へ出なければならなかった。立花神社参道（上宮越）を挽木に見立てると、ひじの形に折れ曲がって南に出る事になるから、挽木のように折れ曲がって出た所という意味で挽木出口というのである。現在の人々は「挽木出口」とは言わず、「ひきぎ」と言っている。立花神社参道の南出口から西へ行き、後小路を通って南へ出ても挽木の形になるが、前記の場合とは逆の形の挽木になる。随分昔の事だが、私と同年の友人、故松井松史氏が挽木の意味について話してくれたことを思い出す。

立花神社参道の西側の細い小路を、昔から「ひゅうたん」と言っていたことを付け足しておく。小字ではなく、小字の内の一部の地名、いわゆる小名（こな）である。「ひゅうたん」は「ひょうたん」の高鍋風のなまり（訛音）であるが興味深い地名である。語源は良く分からないが、この小路は奥の方が立花神社の境内で行き詰まりになっている。ひょうたんには底があるから、行きつまりの意を現しているのかと思っている。

◆ 三十割 (さんじゅうわり)

◆ 鴨作 (かもつくり)

◆ 片島田 (かたしまだ)

大字上江字馬場原の西、木城へ行く道路の西側に消防機庫があり、そこから羽根田に行く道沿いに、高鍋では珍しい「田の神様 (かんさあ)」が祀られている。その南東の水田地帯が「三十割」という名の小字である。

高鍋藩時代には水田や畑などの耕作地は、家臣達に知行地として与えた所と、藩が直接農民に耕作させた藩直轄の所があった。

「三十割」という所は藩直轄の水田であり、上田であった。明治の初めにそこを三十に分割して関係の農民に与えたところから「三十割」と言われる様になったと伝えられている。

十代藩主秋月種殷 (たねとみ) 公が版籍を奉還し (版は領土、籍は人民の意味、大名がその領土と人民を朝廷に返還すること) 藩知事に任命されたのは明治二年 (一八六九) 六月二十日であった。この地域が分割されたのはそれより前、明治二年のはじめごろだろうと推定される。三十に分割された一区画の面積はいくらだったのだろうか。そこに農地を所有していられた三島繁氏に尋ねると、七畝の所と八畝の所があり、更に十三歩という極めて狭いところもあるという。私は三十等分されていたものばかり思っていたので意外に思ったのである。やむなく法務局 (登記所) で調査せざるを得なくなり、字図をたよりに登記簿を調査した。当時から百二十年余も経過し、大きく変化しているが、六畝と七畝と八畝の三種が基本であることがわかった。一反四畝二九歩と広い所もあるが、これは七畝一四歩の二倍と見ることができる。又字名目録によると四五番地あることになっているが、登記簿では一五の番地は空番地となっているから実際は三〇番地であり、字名通り三十割となっているのである。

「鴨作」は消防機庫の少し北から佐藤氏の高鍋茶業までで、古くは水が溜まっていたがよく鴨が浸っていた。人々は「鴨浸 (つかり)」と言っていたのが転訛して「鴨つくり」となったのであろうという。これは故安田尚義氏の話である。

「片島田」は消防機庫から羽根田へ行く道の中央部から西の山手に至る水田地帯で南端は船塚廻 (ふなづかまわり) に接する。大昔は小丸川が氾濫する



川田神社南入口あたりより
「三十割」と「船塚」を望む

丸梓内～田の神様

と上園下 (うえんそのした) (川田神社の西) から船塚廻のあたりまで濁水があふれた事があるらしい。そんな時、羽根田の高台から見ると、船塚が片方の島の様に見える、そんな名が付いたのかも知れない。

平成七年十一月発行・高鍋町議会だより

No.六三

◆ 中嶋 (なかしま)

◆ 船塚廻 (ふなづかまわり)

◆ 飯長寺 (はんちようじ)

◆ 谷坂 (たんざか)

三十割の東が中嶋である。西小学校正門前の、木城町へ行く道に沿った集落、上江保育園のある所が中嶋である。その南部は水田になっていて家並みが無く、車が辛うじて通れる小路が東西に走り、その南側に北平原の家並みが続いている。此処は「片へら」と言う。片へらとは片一方 (かたいつぱう) という意味で、片一方しか人家が無いところから「片へら」と言うのである。中嶋は「中間の嶋」の意味である。小丸川が氾濫をした際、此処は中洲の跡で地勢が高く、濁流の中で嶋となり安全なところからこの呼び名がある。

「船塚廻」は中嶋の西、片嶋田の南に当たり、船塚がその中央で、船塚は平原地域の人々の墓地になっているが、地層が斜めに走っているから隆起した

台地で、盛り土をして作ったいわゆる古墳ではない。地名は船形の塚の様な台地まわりの農地という意味である。

飯長寺という小字は船塚廻の南の地域であるが、前に「お寺の名を地名として残している所」として既に記したから省略するが、そこに修験宗（しゅげんしゅう）の鈴峯山飯長寺跡があることだけを記して置く。

谷坂は飯長寺の西の谷合いの小字で台地の上の牛牧原（上野）に登る長い坂の意である。坂を登り詰めた所は標高八〇・四メートル。坂の登り口の右には、元禄五年（一六九二）河内山清八外二名が奉行となつて建設した谷坂堤二つと、頂上近くに三つ目の堤があつたのだが、堤らしい形を残しているのは登り口の一つだけになっている。昔は坂下の水田を潤していたが、現在は一ツ瀬基盤整備事業で用水が豊富になり堤の必要性が薄れている。

坂の登り口の左の斜面には谷坂墓地がある。明治元年の戊辰戦争に従軍し

た高鍋隊の隊長鈴木来助以下十一名の戦死者を葬った官軍墓地もここである。今、舞鶴公園の中腹にある、亀の背に建っている戊辰戦争の記念碑も元は此処に建設されていたものである。

高鍋の歴史で著名な人物の墓もいくつかある。古い順に挙げると、明倫堂の教授森宣著の墓があり、明治十七年士族授産場として製茶事業を始めた平林忠恕を顕彰する記念碑と墓がある。碑文は城英雄の撰文である。歌人で郷土史家・高鍋町名誉町民の安田尚義師とその祖で藩の絵師であつた安田李仲の外一族の墓などがある。

船塚及び谷坂風景



官軍墓地

平成八年二月発行・高鍋町議会だより

No.六四

◆谷坂（たんざか）（補足）

◆山下（やました）

◆平原（ひらばる）

◆下小路後（したくじうしろ）

前回、谷坂の官軍墓地の事を書いたが少し補足して置きたい。明治元年、西郷隆盛と勝海舟の会談によつて江戸城は戦火を交えることなく官軍に引き渡されたのであるが、奥羽と越後の二藩は奥羽越列藩同盟を結成し、明治新政府に抗戦し、凄惨な内乱に発展した。この戦いを戊辰（ぼしん）戦争と言う。

高鍋藩は一一〇名の高鍋隊を結成し、官軍の一隊として有名をはせたのであるが、隊長鈴木来助以下十一名の戦死者を谷坂に葬り、官軍墓地と称しこれを祀つたのである。戦死者の氏名を記す余白が無いが、了解されたい。

字山下は、九電の変電所から牛牧原に上がつて行く谷合をいう。北部の標高七五・四メートルの金刀比羅神社（こんぴらさん）をまつる「鈴ヶ峰」の南下であるから山下といった。

鈴ヶ峰の麓に、飯長寺という山伏宗の寺院があり、その山号を鈴峰（れいほう）山というのも鈴ヶ峰に基づく。

山下には松本坂掘貫（ほりぬき）井手（隧道）の水の出口が畑田武氏の住居の側にある。水源地は牛牧台地の南側、宇重間（しげはざま）の北部であるから、牛牧台地の字大戸ノ口の下を掘り貫いている井手で、続本藩実録巻一四、文政六年（一八二二）正月二十四日の頃に「松本坂掘貫井手反人自勘（たんにんじかん）二出来」と記（しる）されている。それは「水田を耕作している人々が経費を自己負担で建設した」という意味である。

平原は平坦な原っぱという意味で大字上江の中心的な集落である。かなり



坂田病院方面から見た平原集落

昔から中・下級武士・奉公人・農民が入り交じって住んでいた。幕末ごろの屋敷割図が残っているので高鍋町史三三〇頁に掲載して置いた。

字松本の北端から平原入口の佐藤米穀店を結ぶ道を基点として、北に入り込む小路（くじ）を西の方から順次挙げると、井ノ上村・スタリ村から佐藤茶屋に抜ける小路・下道（したみち）という小路・上小路（うわくじ）・中小路（なかくじ）・下小路（したくじ）・下小路後（したくじうしろ）がある。下小路後は小路ではなく地域名である。東西に走る小路は、安田氏の南から東平原公民館に通ずる道をサシ小路と言ひ、その北の東西に走る道を池内（いけうち）小路、中嶋との間の小路を片平（かたひら）ということは前回記した通りである。サシ小路のサシとは催司と書き「さいじ・さんじ」とも読み、寛文七年（一六六七）以前は庄屋のことを催司と言ったのである。現在の東公民館のある処は上江庄屋の屋敷であったから催司（庄屋）のいる小路という意味である。覚照寺から西の附近は「空ヶ園」と書きソラクソンと呼んだらしい。古記録によく見る地名である。

平成八年五月発行・高鍋町議会だより

No.六五

◆馬場原下（ばばんはるした）

◆川田（かわだ）

◆楠木（くすのき）

馬場原は藩政時代のこの地域の乗馬練習場であった。石井十次が慶応元年（一八六五）に生まれた所である。その生家は昭和四十七年九月一六日に宮崎県指定の史跡となった。現在は十次の二女震子さんの子孫館野氏が住んで居れる。

この集落にある菅原神社は明治一七年に石井十次によって結成された馬場原教育会が始めた朝晩学校でもあった。その規則書は「埒原（ばばのはる）朝晩学校規則」と書かれていた。埒（らち）は馬場のかいという意味であるから「ばばのはる」に宛てたのである。馬場原前は馬場原の東の小字名であり、馬場原下は馬場原の北の水田地帯の小字名で、そこには最近まで河跡湖が残っていた。（議会だより二四号・二七号参照）。なお念のために記して置くが、高鍋・上江の平地は小丸川・宮田川の氾濫によって出来たデルタ地帯（三角州）であるから、時代によって地形が随分変化していると思わねばならない。

豊臣秀吉が天正一五年（一五八七）九州征討の節、黒田長政は一九歳であったが、四月十日財部（高鍋）城主鎌田政心の配下三、四百人ばかりと馬場原にて激戦を交え、よき武者三人を討ち取ったと「九州記」に記されている。長政は羽柴秀長方の参謀黒田孝高（よししたか）の長男であったが、九州征討の功により後に筑前守となり五十二万三千石に封ぜられた。

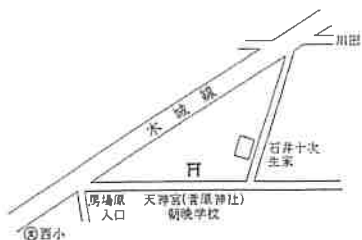
川田は、川沿いに水田があったことを示している字名である。馬場原下に最近まで河跡湖が残っていたことは、小丸川が流れていた事を示している。石井十次の事業の一つに「小丸川河心改修期成同盟会」の設立がある。河の中心、つまり川の流れを変える同盟を設立しようとしたのである。明治四二年八月の大洪水で安蔵の堤防が大方流れてしまつて馬場原下が小丸川になつてしまつた。安蔵に堤防を作り、現在の小丸川の流れの様にするために同盟を作ろうと、一二一名の地主を



馬場原の石井十次の生家附近

集め、久保昌業氏を会長とし、国や県から補助金を出させようとしたのである。実現したのは大正三年、十次逝去の年であった。

楠木は川田の西の小字で文字通り大きな楠の木があったところから名付けられた。ここは、後に明倫堂の教授になった千手八太郎が、左遷された父弥平次と共に少年期・青年期を貧窮の中に過ごした所であった。曾祖父次郎兵衛は町奉行をしたほどの優れた人物だった。



◆ 大年（おおとし）

◆ 鳴野（しぎの）

◆ 柳（やなぎ）

◆ 深川（ふかご）

大年には大年神社がある。祭神は大年神（おおとしのかみ）・稲田姫命（いなだひめのみこと）・若年神・禎嘉王妃（ていかおうひ）である。

年は歳とも書く。年は穀物、特に稲の事を言い、歳はみのり・豊作の意味である。従って三柱の神は皆穀物の神・稲の神・みのりの神であるが、最後に挙げた王妃は東臼杵郡南郷村の神門（みかど）神社に祀られている禎嘉王妃の王妃之伎野（しぎの）妃である。地名の鳴野はこの王妃の呼び名を取ったのであろう。

鳴野地域が持田郷に入ったのは明治十五年十一月で、それまでは川南町の平田村に所属していた。平田村は古くは屏田村と書いたことがある。之伎野王妃は木城町比木神社の祭神の一柱福智王の母君でもある。

比木神社の福智王は毎年旧暦の十一月の初めの申の日、大年下りと称して母君の之伎野王妃に会いにお出でになる。また、旧暦一二月十四日から十日間（現在は三日間）父君禎嘉王を訪ねるため神門御神祭が執り行われる。この二つの神事には御神体は御神輿（おみこし）ではなく袋神として捧持するならわしという。

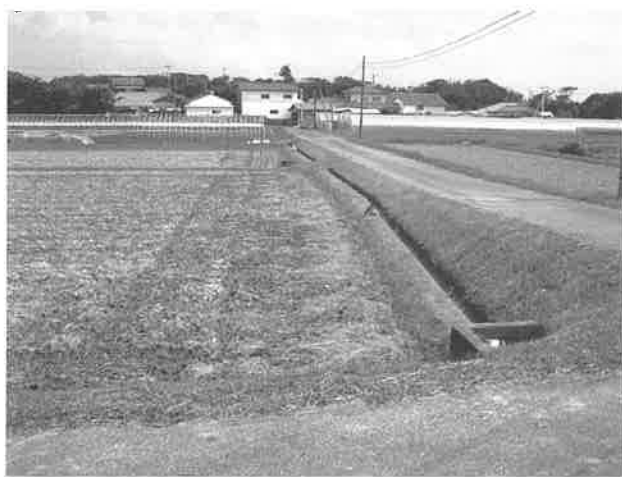
最近、神門神社では奈良東大寺の正倉院と同じ構造の建物を建て西の正倉院と称し、同神社に伝わる三三面の古鏡等を展示し、禎嘉王の故国「百済」のあった韓国との国際交流を図り、村興しの契機ともしようとしている。

大年の南の地域は柳という字名で、地名となった由来は明らかでないが、柳という樹木と関係があるのであろう。樹木の名称を地名とする例は全く無い訳ではない。国道十号線を南から北に向かって進むと高鍋の平地から山手にかかる所の右に堤の見える所がある。堤の右奥に松という字名があるし、上江に楠木という地名もある。

柳の南西が鳴野で、南東が深川である。深川と書いてふかごと言う。蚊口に渡る日豊本線の鉄橋の北の取り付け口から海岸までの地域で、古くは深江（ふかご）と書き、ここに藩政時代には塩田があった。高鍋藩は日向灘に向かっていったから製塩は早くから行われ、特に飛び地の串間には塩屋原（ばる）

塩田があり塩取引の市場もあった。高鍋近辺で使用する塩は深川で作られた。

寛政元年（一七八九）十月、製塩事業が始まった。今から二〇七年前の事である。当時は塩田のことを塩浜と言ったらしい。塩浜の責任者には後藤計吉と福岡利右衛門の両名が塩浜代官に任命され、勘定奉行所の頭取村井郡左衛門が会計、御用係は内田仲太と言いい、高鍋藩直営であり専売制であったことが続本藩実録巻七に記録されている。何時まで続けられていたか分からないが、塩は生活必需品だから廃藩のころまで続いたのではあるまいか。



大年神社と山手の方から鳴野を望む

- ◆ 檜 (ひのき)
- ◆ 檜谷 (ひのきだに)
- ◆ 檜原 (ひのきばる)
- ◆ 檜山 (ひのきやま)
- ◆ 新堤 (しんづつみ)

前回、檜という地名について触れたので、それと関係のある地名について記して置きたい。

小丸川兩岸の低地を沖積層(ちゅうせきそう)というのに対して、兩岸近くの四、五〇メートルの台地を洪積層(こうせきそう)・洪積台地と呼んでいる。霧島火山活動に由来する地層である由だが、私達は川南台地とか、高鍋台地とか言って置こう。国道一〇号線で高鍋大橋を渡り低地から次第に川南台地に登って行くのであるが、その途中右側に二つの溜池が見える。こんな溜池を高鍋では堤と呼んでいる。二つの堤のある所は檜山と言い、そこに至る狭い谷間が檜谷で、檜山の東が檜原、西が檜である。ここは古くから適度な水の浸みでる地域で本藩実録巻五、元禄一四年(一七〇一)八月一日の条に「今年持田檜谷堤ノ普請(ふしん)始マル。土手ノ長サ三六間、人足二九七五人」と記録されている。これは一番下の堤の建設記録で、三六間は約七二メートルに当たる。又、拾遺(しゅうい)本藩実録巻五、元禄一五年(一七〇二)二月二日の条に「檜谷堤水守給六畝、是迄持田掛二人水守へ一人三畝ズツ下サレ、檜谷水守申シ付ク。堤普請(ふしん)人足二、五八二人」とあるのは、堤の水の配分掛りは二人の者に申し付け、報酬として水田三畝ずつ下されることになった。堤普請の人足は二、五八二人というのは二番目の堤にかかった人夫数を示していると思われる。更に拾遺本藩実録巻七、享保九年(一七二四)一二月一四日に「檜谷之頭(かしら)古堤修復人足七二二人」とあるのは、二番目の堤の修復記録と思われる。同書享保一〇年(一七二五)十一月三日の条に「檜谷新堤、雲雀山古堤繕(つくろい)仰セ出サル」とあるのは「雲雀山ノ古堤ノ修復ト同時ニ檜谷新堤ノ建設ヲ行ツタ」という記録と思われる。実は国道一〇号線傍(かたわ)らの二つの堤の外に檜山の北東にもう一つ堤があり小字の名が新堤となつていたのである。ふだんは見えない所にある堤が最も新しいので享保一〇年に建設されている。それでも今から二七二年前に建設されている。古い地名である。

それにしても檜谷附近に檜という名の付いた小字名が四つもあり、相当古い時代にその名があるということからは、古くから檜が多く生え、見事な檜が沢山生産されたに違いない。檜は杉ほどに水分を必要としない様に思われているが、適度な水分はあった方が良くは違いない。日本の木造建築に杉と檜は、真木(まき)と言つて大事にされ、その他は雑木(ぞうき)と言つた事も併せて考えたい。有名な百人一首の中の「三夕(さんせき)」の歌の一首に「・・・真木立つ杣(そま)の秋の夕暮」があり、「真木」というのはここに言う「真木」のことである。檜谷は昔から檜の名産地であつたのだ。



国道 10 号線から檜山の堤を見下ろす

- ◆ 大門（だいもん）
- ◆ 東光寺（とうこうじ）
- ◆ 計塚（はかりづか）
- ◆ 西ヶ原（にしがはる）
- ◆ 関所（せきしょ）
- ◆ 鬼ヶ久保（おにがくぼ）
- ◆ 穴の谷（あなのたに）
- ◆ 牛牧（うしまき）

（一）地名

川南台地に登る十号線の右側（東側から北側）の檜原などについて書いた序に、左側（西及び南側）について書いて置きたい。

ここは日本で有名な国指定の史跡「持田古墳群」のある地域である。円墳七五基、前方後円墳一〇基が計塚から穴の谷に至る五つの小字に点在している。この地域の古墳は西暦三世紀末から七世紀前半ごろまで約四〇〇年間に築造された豪族の墓である。この地域にはその時代の高い文化が開けていたことを示している。

最大の古墳は「計塚」で長さが九九・七メートル、後円部の最も高い所は七・四メートルもある大塚で、標高五五・四メートルの洪積台地の鬼ヶ久保に造られ、その当時は樹木もなく、高鍋方面から見ると、崖上に隆然（りゅうぜん）とした雄姿を見せていたことであろう。その名は昔の秤の形に似ているところから付けられている。

この地域の地名の一部は東光寺を基準にしてつけられている様である。東光寺は貞享四年の高鍋藩寺社帳に依ると文禄年間（一五九二―九六）祐義法印（ゆうぎほういん）によって中興開山された真言宗の寺院で高月寺の末寺であり、東光寺公民館の所に建っていたらしい。今から四〇〇年程前のことである。日向地誌によると明治四年（一八七二）廃寺になっている。東光寺の東に大門という小字がある。そこに東光寺の大きな山門が建っていたらしい。単なる山門でなく大門という名称に注意したい。字東光寺は、東光寺公民館から字計塚の南端近くまで続き、その西が字西ヶ原である。西ヶ原の東の字が関所であるが、ここに関所が置かれてた事はない。しかし、持田・すぐり・鳴野方面の低地と染ヶ岡・川南・通山方面の高地に出る道の分岐点で



計塚と移築された鬼ヶ久保水神

あり、関所の様に大事な場所ではあった。

「鬼ヶ久保」は窪地の意で、町村境であり、県道・国道の東側は高鍋町、西側は川南町であり、鬼ヶ久保の中、高鍋町に六七筆、川南町に五八筆が所属している。公民館附近が窪地で山椒茶屋の南の谷に続いている。谷の南斜面から南の平地が高鍋町の鬼ヶ久保、北斜面が牛牧、公民館附近が川南町の鬼ヶ久保で、古墳の連想から鬼の語を用いたのかも知れない。穴の谷は古墳群の東端、東光寺の西上の台地で、日向国特有の地下式古墳がいくつかあった所からその名がついたのであろう。

(二) 鬼ヶ久保地域の古墳とその他の史跡

前回鬼ヶ久保地域の地名を書いたついでに、標題のことを少し書いて置きたい。梅原未治博士著の「持田古墳群」附図の古墳番号(○内は古墳台帳番号)によって、貴重な出土品の一部について簡略に解説して置く。古墳計塚は今から一六五〇年前ごろの古墳時代の前期に造られたという柄鏡式古墳で、前方部が低くて細長い。中国から渡来した盤龍鏡(ばんりゅうきょう)が出土している。これは中国の後漢(ごかん)時代に作られた鏡で、裏面には龍と虎が向かい合い、その下に小鳥がいる図柄で「青蓋作竟四夷服、多賀国家人民息、胡子孫滅下復、大吉兮」という銘文がある。お大師様の北に接している前方後円墳も同じ柄鏡式で古い形の古墳である。計塚の東南三〇〇メートルに位置する古墳の後円部に石棺の露出しているのを石船(いしふね)塚という。石船塚の北東二〇〇メートルの地点に大きな木のある二五号(二三三)という円墳がある。梅原博士の深索によると、画文帯神獸鏡(がもんたいしんじゅうきょう)と変形四獣鏡が出土し、現在二面とも広島県耕三寺美術館に保存され、国の重要文化財に指定されているし、実物大の写真が町の資料館に展示されている。二八号墳(二六)は通称「山の神塚」と言われ、毎年古墳祭の行われる前方後円墳である。ここからは刀身はないが銀飾りの大小の刀の柄(つか)と純金の耳飾りが出土している。これは韓国京城梨花女子大学校博物館の所蔵する物とほとんど同じもので韓国から渡来した物と言われている。その他は書く余白が無いから省略するが以上述べた事からも持田古墳群の重要性が分かるであろう。

次の東光寺遺跡について述べるが二つの事がある。一つは十三仏板碑(いたび)がある。永禄五天(年)(二五六二)に建立された板碑で、宮崎県でも貴重な石像物である。いま一つは一字一石経(いちじいつせききょう)の埋納の痕跡がある。二センチ位の平たい小石に法華経を一石に一字ずつ書いて埋納供養するのを一字一石経という。写真の一石はその一つを借りて写したものである。華嚴経(けごんきょう)を書く場合もあるという。法華経は何千字あるのか知らないが、一石に一文字ずつ書くのは大変なことである。南

北朝時代(一三三六―一三九二)以降こんな供養が始まったという。高鍋には長法寺堤の傍らにもあったが、現在は失われてしまった。東光寺跡だけ残っている。大切にしたいものである。



右よりの円墳が 25 号墳



一字一石経



十三 仏

- ◆ 俵 橋（たわらばし）
- ◆ 番野地（ばんのじ）
- ◆ 染ヶ岡（そめがおか）
- ◆ 中大久保（なかおおくぼ）
- ◆ 下大久保（しもおおくぼ）

俵橋には、県立農業大学校と構内に農業科学公園（ルピナスパーク）がある。近代農業教育の設備が整い、宮崎県の誇りでもあり、高鍋町の誇りでもある。皇后様が（皇太子・同妃殿下の時）おいでの時の事を宮中歌会始めに詠まれた。『耕運機若きが踏みて 草原の土はルピナスの 花をまぜゆく』という歌碑も本館エリアの東南の庭園に建てられている。

ここは藩政時代に大名行列の通った道で、昔は亭々と立ち並ぶ松並木があり、明治四一年四月には、軍馬補充部高鍋支部が開設されていた。飼育されていた軍馬は約五〇〇頭と当時の日州新聞は伝えている。牧場は尾鈴山山麓で川南村のほか、上江・木城・都農・茶臼原・新田各村にまたがり、川南村だけで売り渡した土地は四〇七五ヘクタールと川南町史は伝えている。

地名の俵橋は、通山小学校へ行く道の信号機のあるあたりに、長さ四メートル位の橋が架かっていたところから付けられたのであろうと言われている。

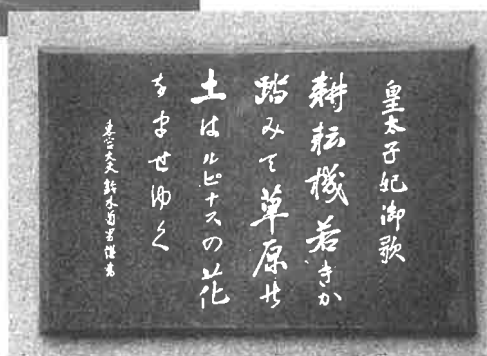
このあたりは国道十号線を境として、西側が川南町、東側、つまり農業大学校側が高鍋町で、北側は通山小学校へ行く道が境である。信号機のあたりの西側は「番野地」という小字名であるが、全部川南町の「番野地」であり、果物店などを営んでいる人もいる。小字名を調べてみると、高鍋町の「番野地」が三十九筆あることになっていて、番地は俵橋に続く番地である。藩政時代には、川南町の番野地も、高鍋の番野地と同じ地域であった。「番」とは所々番のことであつたと思われるが今はどのような番あつたか分からない。「野地」とは開墾すれば畑になる荒れ地のことで、雲雀山には「葦江野地」といってよく知られた所がある。番野地は松並木の敷地・軍用地・県用地と変化の多い土地であつたから、高鍋町の番野地は結果的には農業大学校に吸収されたものと思われる。

染ヶ岡は農業大学校の南東部に当たる丘状の耕地で、家床から通山小学校側へ通ずる道路があり、最も高いところは標高六二・三メートルある。その南

が中大久保・下大久保で、字の名の通り窪地で、染ヶ岡よりも六・七メートルも低く、最も低い所は八メートルも低く、標高五四メートルである。



農業大学校と皇后様碑



- ◆ 馬 坂（うまさか）
- ◆ 鵜戸開込（うどかいこみ）
- ◆ 新開込（しんかいこみ）
- ◆ 深川開込（ふかごかいこみ）
- ◆ 持田開込（もちだかいこみ）

馬坂には馬坂の川が流れ、川南町と高鍋町との境となっている。川の南の字が馬坂で、川の北は平田（へだ）である。兒玉畠雄氏に案内してもらったのであるが、日豊本線のすぐ上まで標高五八メートルの馬坂の台地が突き出ている。線路と浜砂との間には水田があったという。もとは鉄道線路の所も水田であったのであろう。馬坂の川はその深くて狭い谷合を流れている。その川口の標高の最も高いところから、曲りくねって耕作に使う馬の通る小道があったという。馬坂の川の上流（西）には、新井手が出来て二町一反ほどの新田が出来ていた事が記録に残っている。（拾遺本藩実録巻十一）

馬坂の南の鵜戸開込に「高鍋町一般廃棄物最終処分場」が平成八年九月に完成している。廃棄物の処理は今後重要な行政上の問題となるであろうが、二万二千平方メートルの広さがあり、年間三万六千立方メートルの処理能力が見込まれていることは頼もしい。

鵜戸開込以下すべてに、「開込」という語が付いているが「開込」とはどんな意味だろうか。その地域の物知りと言われている幾人かの人に尋ねてみたが、どなたからも明確な答えは返って来なかった。「開墾」「開拓」に関係があるのでは。という事はどなたもおっしゃったが。

高鍋藩の文書に見掛ける語に「請込」（うけこみ）（受込）という語がある。似通った感じがする。家老の責任分担を現わす語で、辞書には「引き受けること」と解釈している。これから考えると「開込」は「開拓することを引き受けている」という意味であろうかと思われる。「持田開込」は「持田地域の農民が開拓を引き受けている所」の意味であり、「深川開込」は「深川（塩田）関係の者が開拓を引き受けている所」の意味であろう。「深川（ふかご）」という地名については「議会だより」六六号の「地名の由来」五三号に記して置いた通り鳴野の東の地名で塩田が開かれていた所である。

しかし、「鵜戸開込」は海岸近くに「鵜戸の口」（うとんぐち）という所があり、

その上の台地を示し、「新開込」（現在は養豚団地）は「新しく指定された開拓地」と開拓地の所在地を示したものである。責任分担を示したものと、所在地を示したものの二種があったと思われる。



高鍋町 一般廃棄物処理場

◆牛ヶ道（うしがみち）

◆鵜戸ノ口（うとんぐち）

◆黒池（くろいけ）

◆亀ノ首（かめんくび）

◆滑岩（ぬめりいわ）

「馬坂の川」から大年神社の西までは標高四九〇メートルの洪積台地で東斜面は絶壁状で岩盤が露出している所もある。崖下にはキンチク藪が繁り、藪の東側を日豊本線が走り、鉄塔の東側は波打ち際まで約二〇〇メートル位である。帯状に水田・雑木林地帯があり、その東側は白い砂浜が波打ち際まで続いている。雑木林地帯には、元は防潮のための松が茂っていたが、現在は松はなく、雑木だけが茂っている。雑木林地帯には、耕作する人や馬の通る路が自然と出来ていたが、現在は耕運機や魚釣りをする人々の家用車の通路となつている。約二キロメートルほど北上すると通路はどだえ、水の溜った所に出る。そのあたりが「鵜戸ノ口」である。冬期以外は字「牛ヶ道」の北端の谷の水が流れ出して、相当幅広く水溜りができる。そのため通路もとだえる事にもなつたらしい。案内者は、この辺に水田を広くもつて居られた柄本順一郎氏である。調査に協力して下さったことに厚く感謝申し上げたい。

「鵜戸ノ口」の鵜戸は、「うと」とも「うど」とも読めるが、広辞苑には「（東北・四国・九州などで）山野の一部が雨水に流されて深く凹んだ所」と解し、原田章之進氏の宮崎県方言辞典には、（一）空洞。（二）木の洞穴。（三）河岸のえぐられている所。（四）溪谷などと解している。柄本氏に繰り返し尋ねたが、このあたりに横穴はないということであった。それでこのあたりの「うと」について考えると、字「牛ヶ道」の北端の谷が日向灘に向かって開け、凹んだ所に雨水が溜まる所を指している様に思われる。某氏が言われる井戸の様な縦穴は遂に見付けられなかった。

「鵜戸ノ口」から南の字地を挙げると、黒池・亀ノ首・滑岩・大年で、牛ヶ道は台地上の南北に長い畑地をいう。だからと長いから牛ヶ道というのであろう。黒池以下の地名の由来は不明だが、黒池は降雨の際、黒土が流れ込む様に関係があり、亀ノ首はアカウミガメの産卵と関係が考えられ、滑岩は

岩盤を露出している所を指している。「ぬめる」は滑る意で「ぬらぬらす」と語源を同じくし、湿潤な岩盤を連想させる。拾遺本藩実録巻二、元禄四年九月四日の条に「持田郷ぬめり岩と申す所へ三枚帆の古船が流れ寄つた」と記録されているから、元禄年間（三〇八年前）にも「ぬめり岩」と呼ばれていたのである。



牛ヶ道の北端の谷が雨期には湖水状に溜る

- ◆ 正祐寺 (しょうゆうじ)
- ◆ 宮ヶ谷 (みやがたに)
- ◆ 迫前 (さこんまえ)
- ◆ 山下 (やまんした)
- ◆ 家床 (いえとこ)
- ◆ 亀塚 (かめづか)

高鍋藩の最も古い寺社帳は、今から三十四年前の貞享四年に作成をされたものである。しかし、正祐寺はそれにも掲載されていない古い寺院であり、その寺はなく、地名として残っている。今の正祐寺の公民館のあたりにあったと伝えられる中世以前の寺院とおもわれる。「弥勒菩薩(みろくぼ)さま(ま)」と言って昔は参詣者が多かったと伝えられている。

「宮ヶ谷」の宮は神社のことをいうから、ここでは大年神社の事であろう。その参道の入口の西側が「宮ヶ谷」である。そこに僧侶の墓が四つある。入口に近い墓から年号を調べると、延享三年(一七四六)・享保十一年(一七二六)・文化四年(一八〇七)・嘉永五年(一八五二)に建てられた墓で、何れも江戸時代の年号で、それほど古い墓ではない。最も古い墓でも八代將軍徳川吉宗の時代である。

また、鴨野には真言宗の大仙寺があった。永正元年(一五〇四)妙光院宥秀が建立し、境内は四畝一〇歩であるが場所が明らかでなく明治三年(一八七〇)廃寺になっている。

「迫前」(さこんまえ)の「迫」は行きづまった谷をいう語で「宮ヶ谷」の南の水田がそれであろう。

「山下」は文字通り正祐寺の登り口に当たり、家床・真米・浜の各方面からの道の出会う所あたりである。

「家床」の由来は明らかではないが「家処(いえところ)」のあて字ではあるまいか。鴨野橋の附近を「上塩入(かみしおいり)」、「勝(すぐ)り」の北を「下塩入(しもしおいり)」と言うが、塩は「潮」のあて字で、「満潮」の時には、潮がそのあたりまで入って来るほど低く、亀塚の築造される以前の時代ごろは、家床あたりでないと人の住む家は建てられない低湿地帯であったのである。家床は上ノ別府の麓の部分で住居を建設しても安全な場所であ

った。高鍋方言では「処(ところ)」を「とこ」とも言う。

「亀塚」は沖積層にある前方後円墳であり、その名の通りの形で、前方部が低くて短く、帆立貝に似ているところから帆立貝式古墳とも言われている。後円部は直径四四メートルもあり、周囲に二〇数メートル隔てて周塹(しゅうこう)(まわりのほり)のあった名残がある由。昭和八年別府市の丸山某が所有権を買い取り、内部の針葉樹製の木棺と鏡類・硬玉製勾玉・家形埴輪(はにわ)の堅尾木(かつおぎ)を掘り出し、旧形通り埋め戻した。



東北から望む亀塚

- ◆ 下河原（しもがわら）
- ◆ 堂 藪（どうやぶ）
- ◆ 高河原（たかがわら）
- ◆ 真 米（まごめ）
- ◆ 持 田（もちだ）
- ◆ 羽 坂（はざか）
- ◆ 船 塚（ふなづか）

国道十号線の高鍋大橋の北詰めの辺りが下河原で、中央部を十号線が走り、西側の低い所に東児湯消防本部があり、東側に「時間の励行日本一」の大時計台があり、堤防の北側が低くて広い運動公園で、東端に野球場が造られ、北の隅に佐川急便の施設がある。小字は堂藪と言ひ、堤防の築かれる以前は、洪水の度に被害を被る地域であった。

明治九年に字図が完成した頃には、六二七九番地から六三〇六番地まで二七筆の土地があった。現在は竹藪が多いが、お堂のあった形跡は無いと言ふ（柄本順一郎氏談）。堂藪という地名から考えると、鳴野は今でも水神様が三ヶ所に祀られているから、あるいは水神様のお堂があったのかも知れない。しかし今は無い。下河原の北が高河原で西側を十号線が走り、国道の西側に商店が出来ている。高い地域が河原になったので高河原と呼ばれ、後から河原となった部分を下河原と呼んだ。初めは「したかわら」と呼ばれていたと思うが、高（たか）と下（した）との意味がいまいになったところから、「しもがわら」と呼ばれるようになったと思われる。

亀塚の南が真米で、その南が小字の持田であり、大字にも用いられる様になったのであろう。真米は赤米（あかまい）に対して用いられた語で、飯米のことである。赤米については、嵐嘉一著の「日本赤米考」が雄山閣から発行され、高鍋藩の赤米についても豊富な資料が示されている。赤米は「とうぼうし」（唐法師）とも言ひ、玄米の種皮が赤い米で、痩せた農地でもよく繁殖し収量も多く、炊飯すると炊き増しが多い。しかし栄養価は白米ほど高くない。高鍋藩でも下級の者に支給される飯米であった。真米は栄養価の高いうまい白米となる米であった。「真米」はその真米のできる代表的な所であった。高鍋藩の「新納（にいり）代官目安」（法令）を見ると、高鍋・上江・持田・

三納代・日置・椎木・川原の中で最も年貢（租税）の高い所は持田村であった。年貢米が高いということは生産も高いということでもある。真米の東が羽坂、羽坂の東が船塚である。いずれも語源は明らかではない。しかし、羽坂は正祐寺に登る坂の端の意味であり、船塚は舟形をした古墳の意味で、亀塚と関係のある名称かもしれない。



山下のあたりから真米を望む

- ◆ 勝り (すぐり)
- ◆ 勝り下 (すぐりした)
- ◆ 上塩入 (かみのしおいり)
- ◆ 樋の本 (といのもと)
- ◆ 持田 (もちだ)
- ◆ 池田 (いけだ)
- ◆ 島の下 (しまのした)
- ◆ 杉瀬 (すぎせ)

高鍋大橋の北詰め辺りが下河原であり、そのすぐ西が「勝り下」、その北の集落が「勝り」である。「字図」には「勝利」と書いてあるが法務局の原本には「勝り」と書かれている。ここはあみだ様と菅原神社が一緒に祭られている所で、丁度取材に行った日が新暦正月十四日であった。村人と共に、あみだ様には両手を合わせ、菅原神社には拍手を打って参拝した。各戸から二合半ずつ集めた米で大きな鏡餅が奉納されていた。後に各戸に切り分けてられ配られると言うことであつた。そもその起こりは黒木ますえと言うかみさんが裏山に祭っていたのをここに祭つたが、拝殿を造れなかつたので合祀(ごうし)したと言う。手洗鉢には昔と変わらぬ清らかな水を湛えている。辞書の「広辞苑」によると「すぐり」は古代朝鮮語の村長の意味という姓(かばね)の一つと言われるが、近辺に韓国文化の名残は全く見当たらないから、古代韓国語の残存は否定されるべきであろう。「すぐり」のもう一つの意味は、藁(わら)を整理して縄をない筈(むしろ)や俵を編み易い様を選びすぐると言う意味があるから、多分その意味であろう。この集落は夜作業(夜なべ)の盛んな純農村であつたから「すぐり藁」は重要なことであつた。

鳴野の大年神社の之伎野王妃は木城の比木神社の祭神福智王の母君で神門神社の祭神禰嘉王の王妃に当たるが、旧暦十一月初めの申の日に大年下りと称して母君に会いにお出でになり、その帰り途に「勝利」で休憩なさる。昔は田圃の中に芝生を植え場所を拵(こしら)えてあつたが現在は村の中で休憩なさるという。

勝利の南の水田は「上の塩入」と言われている。「塩」は「潮」の当て字で「満潮」の時にはこの辺りまで「潮」が満ちて来るので鳴野橋近くの「下塩入」

に対するものでここは「川上」になる。

「樋の本」は「池田」との境の小川の上を樋を掛けて水を池田の耕地に注いだことから小字の名となつた。今では橋にその施設がされている。

「杉瀬」はブローラー加工の場所あたりで砂や土の堆積する所で砂利類の無い所であつた。杉があつたかどうかは分からないが、字名となっているから杉が生えていたのであろう。「持田」は大字の名ともなっているが、由来は明らかでない。「島の下」はその名の通り小島の様に高い所があつた所であろう。このあたりの地名は自然の地形に人文的な事が付いている。



樋の本地区の様子

◆ 菖蒲池東往還北（しょうぶいけひがしおうかんきた）

◆ 菖蒲池東南（しょうぶいけとうなん）

◆ 下中州（しもなかす）

◆ 萩原下（はぎわらした）

◆ 新萩原（しんはぎわら）

◆ 天神原（てんじんはら）

◆ 菖蒲池（しょうぶいけ）

◆ 中須ノ一・二・三・四（なかすノ一・二・三・四）

菖蒲池東往還北。この地名の「菖蒲池」については「議会だより」十一号に書いた通り、旭屋鉄工所から下屋敷へ抜ける道が田んぼへ出たところに池があり、黄色の花の咲く菖蒲が茂っていた。それが菖蒲池の地名の起こりである。

「往還」とは「大通り」の意味である。稲荷町から二つに分かれた道の北側の道は高校の正門から小丸の交差点を通り、農協の前へ出て、西小学校の正門から木城町の「出店」を経て「高城」に連なる主要道路で、大正十二年に開通したと思っている。高鍋駅に連なる主要道路は「蚊口往還」と言われている。

「下中州」は南九州化学KKの炉心部で電気部があった。「萩原下」には「水町某」という方が居られ、朝鮮に鉱山を経営して居られるという話であった。とも角、此処には「高鍋藩」の蔵があったと伝えられ、堤防の下は極めて深く、倉庫の米を積出すのに、千石船を横付けできる所があり、紀州のみかん船の立ち寄る所でもあり、尾鈴山の木炭等の物産は此処から積出ができたという話であった。美々津に人材の出入の港、蚊口港は物資の積出しの港であった。萩原下の南が「新萩原」、萩原下の西が「萩原」。

東小学校周辺のかんがい用水は「天神鶴」と呼ばれていた。「鶴」の本来の意味は「水流」（溝の意）、天神鶴の一つに「大將軍様（でじょごんさん）下の池」があった。それは小丸川の河跡湖であり、鯉や鮒が沢山捕れた。

中須ノ一・二・三・四は小丸川南岸の堤防の区間で、中州の宛字である。中須ノ四は町営野球場の北側の入口に下りる所と小丸川岸に下りて行く所のあ

る箇所である。中須ノ一・二・三は堤防の南斜面。

中須樋管あたりが中須ノ四であり、その南斜面を中須ノ三と見てよいであろう。中須樋管のあたりは川岸の屈曲が多く、樋管に附いている階段も二十二・三段あり、樋管の下は五〇メートルほどの水路があり、その上・下に各四・五〇メートル平面のコンクリートが張つてある。

高鍋大橋の南詰めには、第三代藩主種信公の隠居所と能楽堂の跡があった。隠居所は「御屋敷」と言い、能楽堂の跡は荒川氏の屋敷に続く畑に隣接する三角形の十坪程でそこを基点として、河川敷に数百坪が残っていた。



高鍋大橋の南詰め—西側に能楽堂あとが

◆ 高鍋城の施設 (一)

高鍋城は伝うる所によれば柏木左衛門尉(じょう)という者が創築した所であるという。大字南高鍋に属し、小字四三で旧城内である。高鍋城は堀・門・三の丸・二の丸・本丸・詰の丸の六つの部分からなる。

東正門の防備のため堀を弧形に巡らし、東正門に大手門、堀の北西の端に島田門、南西の端に蓑崎門がある。全長五三〇メートル、幅は広い所で二四メートル、狭い所で一二・三メートルである。堀の外側は平らな芝生を土手とし、内側には土塁を築き、その上に瓦をふいた白壁の築地塀を築いたらしい。堀の水は、いわゆる長友勘右衛門水路から取り入れられていた。塩田川と城堀の間は深い湿地帯となっていた。大手門は城の表門で、大手橋を渡った内側にあり、門内に番所があり、番所には牢もあり、未決囚「大手預り」の制度もあった。元禄八年(捨遣本藩実録巻三)の頃は大手門・蓑崎本門はくぐりを明け、蓑崎本門は錠を下ろし、御用の時ばかり開け、くぐりは御在国明け六つに開け、暮れ六つに錠を下ろされ、島田門は御在国留守共本門はたて、くぐりより出入し、夜は四つ時に錠を下ろすきまりであった。三城門とも責任者の家老が別々に任命されていた。堀の内側が三の丸。三の丸の北側に普請方・勘定所・中央に廉の屋敷・藩校、南側に家老屋敷、その西に厩舎があった。岩坂門の内側が二の丸で、右手に八幡宮・白山宮、その東に大楠、南側に武器庫・朱印蔵があった。東正面の長い石段を上り詰めると長峰門である。その内側が藩政庁で御書院の門があり、各人はその坐席はきまっていた。御所院は奥殿に通ずる。奥殿は藩主の私生活の場所であった。御書院の右奥には大目付所・御奉行所・御家老所があり、御書院番所詰所の者が雑用を取りしきっていた。

次の「地名の由来」には、明治七年八月十八日従四位秋月種樹公謹識の碑文と城勲撰の「西南の役記念碑」との訓読文を掲載したいものだと思っている。



従四位 秋月種樹公 碑文



平成二二年一月発行・高鍋町議会だより No.八三

◆ 高鍋城の施設 (二)

【解説】 秋月種樹公は山内容堂公に頼山陽の書風を勧められ、之に傾倒している。本碑は明治七年八月の作であり、雄勁なるものと言うべきであろう。この文はもと官軍墓地にあったものであるが、今は元官軍墓地を偲ばせる処に建てられている。

姦雄割拠(かんゆうかつきよ)シテ帝(てい)ていいん(いん)ヲ抑制シ名義ヲ壞(かい)い(い)乱シ、彝倫(いりん)ヲ侮蔑(ぶべつ)シ千百年間大道無シ。大氏肉食者ヲ伸(の)バシ、国ヲ憂フルヲ知ラズ。誰(た)ダ身ヲ愛シ、勢(せい)ニ附キ、利二近ヅキ臻(いた)ラザル所無シ。昔、楠公、河内(かわち)ヨリ起リテ恢復(ふく)ヲ主唱シ、勤王(きんのう)ノ民ヲ募(もつ)フの(つ)リ、忠憤激烈兵ヲ用フルコト神ノ如シ。惜シイ哉、大業成ルニ垂(なん)ナントシテ、天子蒙塵(もうじん)ス。爾来(じらい)幾年、王道滅湮(めつゐん)シ、風俗頹傾(たいけい)シ、邪説真ヲ乱ス。譬(たと)ヘバ雲霧四塞(うんむしさい)セルガ如ク、久シク日辰(にっしん)現レズ。時ナルカナ時ナリ。天、

定マリテ人ニ勝ツ。戊辰ノ変、幕府果タシテ反（そむ）ク。天皇、赫怒（かくど）シ、官軍発ス。紫宸（ししん）ノ錦旗、嚮（むか）フ所、東北服遵（ふくじゆん）ス。及チ封建ヲ廢シテ郡県トナシ、上下（しやうか）ノ勢ヲシテ和洽協均（わこくせうきん）セシメ、普天（ふてん）ノ下（もと）、率土（そつと）ノ浜（ひん）、王土（おうど）ニ非ザル莫（な）ク、王臣（わうしん）ニ非ザル莫（な）シ。国威（こくゑ）是（ここ）ニ於テカ振ヒ、カヲ四隣（しりん）ニ宣（のたま）フ、海外（かいがい）諸洲（しよしゆ）往来（わらい）津々（つづ）（お）うらいしんしん）タリ。凡ソ學術技芸（がくぎゆん）ノ精（せい）以テ至リ、刑律民法（けいりつめいほ）ノ由（よ）ル所、広ク万国（ばんこく）ノ長（ちやう）ヲ取り、賛成（さんせい）シテ維（こ）レ新（あら）タナリ。鉄道（てつどう）成リ、電氣（でんき）通ジ、文明（ぶんめい）ノ効（こう）、日（に）彬々（ひんひん）然（ぜ）ん）タリ、要スルハ其ノ始メハ皆是レ戦士（せんし）、捷（かち）ヲ奉ズルノ所為（し）よい）ナリ。若シ一戦（いっせん）シテ姦人（かんじん）ニ勝タセレバ、坐（ま）シテ惟（こ）レ安（いづ）クニ今日（けふ）ノ大平（たいへい）ヲ開キテ、無窮（むきゆう）ノ鴻基（こうき）ヲ立テルヲ得ンヤ。余旧封（きうほう）高鍋（たかかほ）ヲ過（よ）ギリ招魂（しやうこん）ノ碑（いしぶみ）ヲ展（の）べ、諸士（しよし）ノ難（なん）ニ殉（じゆん）ジ、節ヲ完（かん）ウシ、忠純（ちゆん）無岐（むぎ）ニシテ利害（りがい）ニ変（へ）セズ、王師（わうし）ニ翼振（よくしん）スルニ感ズ。又、今（いま）、尚ホ存（ぞん）シテ々（きき）ノ時ヲ目撃（もくげき）セザルヲ憾（うら）ム。徘徊（はいかい）顧惜（こしやく）（はいかいこせき）、寓感（うかん）勒詞（りやくし）（ろくし）セン。蓋（けだ）シ上（かみ）ハ以テ天下（てんか）ノ慟（なみ）（かなしみ）ニシテ、下（しも）ハ以テ其ノ私（し）ヲ哭（なく）（こく）スルガ為ナリ。

明治七年八月十有八日

從四位

秋月種樹 謹識



「西南の役 記念碑」の裏面



たかなべ 地名の由来

平成18年3月 発刊

平成30年3月 第3刷

発 行 高鍋町教育委員会

住所 高鍋町大字上江8335番地

電話 0983-23-3326

高鍋町議会

住所 高鍋町大字上江8437番地

電話 0983-26-2020